

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XX

鳥取県東伯郡琴浦町

UME DA KAYA UNE
梅田萱峯遺跡Ⅱ

2007

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省 倉吉河川国道事務所



1. 遺跡遠景（南から）



2. 3区俯瞰



1. SI11完掘状況（北から）



2. SB1完掘状況（東から）

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

現在、県内においては、山陰自動車道の整備が着々と進められているところではありますが、当センターは、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

そのうち、琴浦町にある梅田萱峯遺跡では、弥生時代の独立棟持柱をもつ掘立柱建物跡など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができ、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

鳥取県埋蔵文化財センター
所長 久保 穰二郎

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取一島根県境）までの92.3kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡琴浦町から西伯郡大山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された一般国道9号のバイパス（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成18年度は、「梅田萱峯遺跡」、「窺津乳母ヶ谷第2遺跡」、「笠見第3遺跡」の3遺跡について鳥取県教育委員会と発掘調査の委託契約を締結し、鳥取県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「梅田萱峯遺跡」の平成17年度調査の一部を合わせた調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県教育委員会の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成19年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長 嘉本 昭夫

例 言

1. 本報告書は、国土交通省倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道9号（東伯中山道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成17年度に行った梅田萱峯遺跡3区及び平成18年度に行った梅田萱峯遺跡1区の発掘調査報告書である。なお、梅田萱峯遺跡1区は平成17年度にも発掘調査を行っている。
2. 本報告書に記載した遺跡の所在地及び調査面積は以下の通りである。
梅田萱峯遺跡：東伯郡琴浦町大字梅田 調査面積 1区4,450㎡
3区1,100㎡
3. 本報告書で示す標高は、3級基準点H10-3-16（X：-53986.046、Y：-66601.614）を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。なお、X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第V系の座標値である。
4. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「赤碕」「伯耆浦安」、琴浦町（旧赤碕町）発行の「赤碕町都市計画図1」を使用した。
5. 本報告にあたり、調査前航空写真撮影、調査後航空写真撮影、調査前地形測量・基準点測量、調査後地形測量、石材産地同定分析を業者委託した。
6. 本報告書に掲載した遺構・遺物実測図の作成は、埋蔵文化財センター及び埋蔵文化財センター調査第一係（東伯調査事務所）で行い、調査担当者が作成したものを整理作業員が浄書した。なお、一部の石器の実測・浄書を業者に委託した。
7. 本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査担当者が撮影した。
8. 本報告書の執筆は湯村 功、小口 英一郎、瀨本 利幸が分担し、目次に文責を記した。
9. 発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
10. 現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々・機関に御指導・御協力いただいた。記して深謝します。（敬称略）
浅川 滋男、琴浦町教育委員会

凡 例

1. 遺物の註記における遺跡名は、梅田萱峯遺跡 1 区は「ウメ 1」、同 3 区は「ウメ 3」を略号とし、合わせて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。
2. 本報告書で用いた遺構の略号は以下の通りである。なお、1 区の遺構番号は平成17年度調査からの通し番号を付している。
SI：竪穴住居跡 SS：段状遺構 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 P：柱穴・ピット
3. 本報告書で用いた遺物の略号は以下の通りである。
S：石器 F：鉄器
記号のないものは土器・土製品
4. 遺構図・遺物実測図の縮尺については、特に説明のない限り以下の通りである。
竪穴住居跡・段状遺構・掘立柱建物跡：1/60 土坑：1/20、1/40 柱穴・ピット：1/40
土器：1/4 石器・石製品：2/3、1/2、1/4
鉄器：1/2
5. 遺構図・遺物図に用いたスクリーントーン及び記号は、特に説明のない限り以下の通りである。また、遺物実測図の断面は須恵器を黒塗りとし、それ以外のは白抜きで示した。
■ 地山 □ 貼床 ■ 焼土・焼土面 ■ 炭化物層 ■ 赤彩土器 ■ 石器磨り範囲
S：石器・石製品 ●：土器・土製品 □：石器・石製品 ▲：鉄器
6. 遺物観察表は出土遺構ごとに掲載した。法量記載における※は推定復元値、△は残存値を示す。
7. 本報告における遺構・遺物の年代観は以下の文献を参照とした。
清水 真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』正岡睦夫・松本岩雄 編 木耳社
8. 発掘調査時において付していた遺構番号は以下のように変更した。

	調査時遺構名	報告時遺構名		調査時遺構名	報告時遺構名		調査時遺構名	報告時遺構名
1 区	SS1	SS3	1 区	P1	P135	1 区	P11	P145
	SS2	SI11		P2	P136		P13	P146
	SK1	SK55		P3	P137		P14	P147
	SK2	SK56		P4	P138		P15	P148
	SK3	SK57		P5	P139		P16	P149
	SK4	SK58		P6	P140		P17	P150
	SK5	SK59		P7	P141		P18	P151
	SK6	SK60		P8	P142		P19	P152
	P20	P133		P9	P143		谷部土器ブロック	土器溜り4
	P21	P134		P10	P144		3 区	SK2

目 次

序
序文
例言
凡例

第1章 調査の経緯

- 第1節 調査に至る経緯…………… (湯村・小口) 1
- 第2節 調査の経過と方法…………… (湯村・小口) 2
- 第3節 調査体制…………… (湯村) 4

第2章 遺跡の位置と環境

- 第1節 地理的環境…………… (湯村) 5
- 第2節 歴史的環境…………… (湯村) 5

第3章 調査の成果 (1区)

- 第1節 遺跡の立地と層序…………… (小口) 11
- 第2節 調査の成果…………… 14
 - (1)概要…………… (小口) 14
 - (2)竪穴住居…………… (小口) 15
 - (3)段状遺構…………… (小口) 20
 - (4)土坑…………… (小口) 21
 - (5)土器溜り…………… (小口) 25
 - (6)ピット…………… (小口) 29
 - (7)遺構外出土遺物…………… (小口) 35

第4章 調査の成果 (3区)

- 第1節 遺跡の立地と層序…………… (湯村) 42
- 第2節 調査の成果…………… 43
 - (1)概要…………… (湯村) 43
 - (2)竪穴建物…………… (湯村) 43
 - (3)段状遺構…………… (湯村) 54
 - (4)掘立柱建物…………… (湯村) 55
 - (5)落とし穴…………… (湯村) 59
 - (6)貯蔵穴…………… (湯村) 62
 - (7)その他の土坑…………… (湯村) 63

(8) 遺構外出土遺物	（湯村） 69
(9) 絵画土器、土製品	（湯村） 75
(10) 石鏃製作関係資料	（湯村） 76
(11) 鉄器	（湯村） 78

第5章 自然科学分析の成果

第1節 梅田萱峯遺跡出土黒曜石の産地推定	（株式会社 古環境研究所） 80
第2節 梅田萱峯遺跡出土サヌカイトの産地推定	（株式会社 古環境研究所） 86

第6章 総括

第1節 1区の調査成果	89
第2節 梅田萱峯遺跡全体から見た3区の特徴	89

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 東伯中山道路ルートと関係遺跡位置図	1	第34図 遺構外出土遺物(3)	38
第2図 調査地位置図	2	第35図 遺構外出土遺物(4)	39
第3図 遺跡位置図	5	第36図 3区基本土層図	42
第4図 周辺遺跡分布図	7	第37図 3区遺構配置図	42
第5図 1区遺構配置図	9・10	第38図 SI1・2(1)	44
第6図 1-C区土層断面図(1)	12	第39図 SI1・2(2)	45
第7図 1-C区土層断面図(2)	13	第40図 SI1出土遺物	46
第8図 SI7	14	第41図 SI2出土遺物	47
第9図 SI7出土遺物	15	第42図 SI1・2出土遺物	48
第10図 SI11	16	第43図 SI3	50
第11図 SI11遺物出土状況図	17	第44図 SI3出土遺物	50
第12図 SI11出土遺物(1)	18	第45図 SI4	51
第13図 SI11出土遺物(2)	19	第46図 SI4出土遺物(1)	52
第14図 SS3	21	第47図 SI4出土遺物(2)	53
第15図 SS3出土遺物	21	第48図 SI5	54
第16図 SK55	22	第49図 SI5出土遺物	54
第17図 SK56	22	第50図 SS1	54
第18図 SK56出土遺物	22	第51図 SS1出土遺物	55
第19図 SK57	23	第52図 SB1	56
第20図 SK58	23	第53図 SB2	57
第21図 SK59	24	第54図 SB3	58
第22図 SK59出土遺物	24	第55図 SB4	59
第23図 SK60	25	第56図 SK8	59
第24図 SK60出土遺物	25	第57図 SK12	60
第25図 土器溜り4	26	第58図 SK15	60
第26図 土器溜り4出土遺物(1)	27	第59図 SK18	60
第27図 土器溜り4出土遺物(2)	28	第60図 SK21	61
第28図 P133及びび出土遺物	31	第61図 SK24	61
第29図 P134及びび出土遺物	31	第62図 SK26	62
第30図 ピット(1)	32	第63図 SK27	62
第31図 ピット(2)及びびP150出土遺物	34	第64図 SK10・13	62
第32図 遺構外出土遺物(1)	36	第65図 SK11	63
第33図 遺構外出土遺物(2)	37	第66図 SK1	63

第67図	SK3	64
第68図	SK3出土遺物	64
第69図	SK4	64
第70図	SK4出土遺物	64
第71図	SK7	65
第72図	SK14	65
第73図	SK19	65
第74図	SK20	65
第75図	SK22	66
第76図	SK22出土遺物	66
第77図	SK23	66
第78図	SK25	66
第79図	遺構外出土遺物(1)	67
第80図	遺構外出土遺物(2)	68

第81図	遺構外出土遺物(3)	69
第82図	遺構外出土遺物(4)	71
第83図	遺構外出土遺物(5)	72
第84図	遺構外出土遺物(6)	73
第85図	遺構外出土遺物(7)	74
第86図	絵画土器・土製品	75
第87図	石鏃製作関連資料	77
第88図	鉄器	79
第89図	梅田萱峯遺跡出土黒曜石判別図(1)	82
第90図	梅田萱峯遺跡出土黒曜石判別図(2)	83
第91図	黒曜石産地位置図	85
第92図	梅田萱峯遺跡出土サヌカイト判別図(1)	87
第93図	梅田萱峯遺跡出土サヌカイト判別図(2)	87
第94図	自然科学分析試料	88

挿表目次

表1	東伯中山道路関係の調査一覧	2
表2	SI7出土土器観察表	15
表3	SI7出土石器観察表	15
表4	SI11出土土器観察表	20
表5	SI11出土石器観察表	20
表6	SS3出土土器観察表	21
表7	SK56出土土器観察表	22
表8	SK59出土土器観察表	24
表9	SK60出土土器観察表	25
表10	土器溜り4出土土器観察表	29
表11	土器溜り4出土石器観察表	29
表12	P133・134・150出土土器観察表	34
表13	遺構外出土土器観察表	40
表14	遺構外出土石器観察表	41
表15	SI1・2出土土器観察表	49
表16	SI1・2出土石器観察表	49
表17	SI3出土土器観察表	51

表18	SI4出土土器観察表	52
表19	SI4出土石器観察表	53
表20	SI5出土土器観察表	54
表21	SS1出土土器観察表	55
表22	SS3出土石器観察表	55
表23	土坑内出土土器観察表	70
表24	遺構外出土土器観察表	70
表25	絵画土器・土製品観察表	75
表26	遺構外出土石器観察表(1)	75
表27	遺構外出土石器観察表(2)	76
表28	石鏃製作関連資料観察表	78
表29	鉄器観察表	79
表30	黒曜石製石器産地推定結果	81
表31	産地原石判別群	84
表32	原石採取地と試料数	86
表33	分析対象試料および推定結果一覧	86

写真図版目次

巻頭図版1	1. 遺跡遠景(南から) 2. 3区俯瞰
巻頭図版2	1. SI11完掘状況(北から) 2. SB1完掘状況(東から)
PL.1	1. 1-C区斜面部完掘状況(北から) 2. 1-B区平坦部完掘状況(南から)
PL.2	1. SI7完掘状況(北から) 2. SI7遺物出土状況(北から) 3. SI7土層断面(南西から) 4. SI7-P1土層断面(北西から) 5. SI7-P2土層断面(北東から)
PL.3	1. SI11完掘状況(北から) 2. SI11遺物出土状況(北から) 3. SI11土層断面(西から) 4. SI11土層断面(北から)
PL.4	1. SS3完掘状況(東から) 2. SS3土層断面(南東から) 3. SS3土層断面(南から) 4. SS3-P3土層断面(南から) 5. SS3石斧出土状況(南東から)
PL.5	1. SK55土層断面(南東から) 2. SK55・56完掘状況(東から)

	3. SK57土層断面(北東から) 4. SK57完掘状況(東から) 5. SK58炭化物出土状況(西から) 6. SK58土層断面(南から)
PL.6	1. SK58焼土検出状況(西から) 2. SK58完掘状況(東から) 3. SK59土層断面(南から) 4. SK59完掘状況(東から) 5. SK60土層断面(北東から) 6. SK60完掘状況(北から)
PL.7	1. 縄文土器57出土状況(南から) 2. SI11出土高坏17出土状況(南東から) 3. P133土師器54出土状況(1)(北東から) 4. P133土師器54出土状況(2)(南東から) 5. P134須恵器短頸壺55出土状況(南東から) 6. 須恵器96出土状況(北東から) 7. 須恵器95出土状況(南東から) 8. 土器溜り4遺物出土状況(東から)
PL.8	SI11出土土器(1)
PL.9	1. SI11出土土器(2) 2. SK60出土土器
PL.10	1. SI7、SS3、SK55・56・59・60出土土器

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|----------------------|
| | 2. 敲石 | | 3. SK18土層断面 (西から) |
| PL.11 | 1. P133出土土師器 | | 4. SK18完掘状況 (東から) |
| | 2. P134出土須恵器 | | 5. SK21土層断面 (南から) |
| | 3. 土器溜り4出土土器(1) | | 6. SK21完掘状況 (南から) |
| | 4. 土器溜り4出土土器(2) | PL.29 | 1. SK24土層断面 (西から) |
| | 5. 遺構外出土土器(1) | | 2. SK24完掘状況 (北から) |
| | 6. 遺構外出土土器(2) | | 3. SK26土層断面 (南から) |
| | 7. 遺構外出土土器(3) | | 4. SK26完掘状況 (北から) |
| | 8. 遺構外出土土器(4) | | 5. SK27土層断面 (北から) |
| PL.12 | P150・土器溜り4出土土器(3) | | 6. SK27完掘状況 (南から) |
| PL.13 | 遺構外出土土器(5) | PL.30 | 1. SK10土層断面 (東から) |
| PL.14 | 遺構外出土土器(6) | | 2. SK10・13完掘状況 (南から) |
| PL.15 | 1. 遺構外出土土器(7) | | 3. SK11土層断面 (東から) |
| | 2. 遺構外出土土器(8) | | 4. SK11完掘状況 (東から) |
| PL.16 | 1. 石鏃 | | 5. SK1土層断面 (北から) |
| | 2. 砥石 | | 6. SK1完掘状況 (南から) |
| PL.17 | 1. 磨製石斧 | PL.31 | 1. SK3土層断面 (南から) |
| | 2. 1-C区土層断面(1) (南から) | | 2. SK3土層断面 (東から) |
| | 3. 1-C区土層断面(2) (南から) | | 3. SK3完掘状況 (南から) |
| | 4. 1-C区土層断面(3) (南から) | | 4. SK4遺物出土状況 (南西から) |
| | 5. 1-C区土層断面(4) (南から) | | 5. SK4完掘状況 (南から) |
| PL.18 | 1. 3区遺構検出状況 (俯瞰) | | 6. SK7完掘状況 (西から) |
| | 2. 谷部土層断面 (北から) | PL.32 | 1. SK14土層断面 (南西から) |
| PL.19 | 1. SI1完掘状況 (東から) | | 2. SK14完掘状況 (西から) |
| | 2. SI1検出状況 (北から) | | 3. SK19完掘状況 (西から) |
| | 3. SI1土層断面 (東から) | | 4. SK20完掘状況 (東から) |
| | 4. SI1土層断面 (北から) | | 5. SK22完掘状況 (西から) |
| | 5. SI1遺物出土状況 (東から) | | 6. SK23土層断面 (西から) |
| PL.20 | 1. SI2土層断面 (北東から) | | 7. SK23完掘状況 (西から) |
| | 2. SI2-P2土層断面 (南から) | | 8. SK25土層断面 (東から) |
| | 3. SI2-P3遺物出土状況 (東から) | PL.33 | SI1出土土器(1) |
| | 4. SI2-P2完掘状況 (南から) | PL.34 | SI1出土土器(2) |
| | 5. SI2遺物出土状況 (東から) | PL.35 | SI1出土土器(3) |
| | 6. 作業風景 (東から) | PL.36 | SI2出土土器(1) |
| PL.21 | 1. SI2完掘状況 (東から) | PL.37 | 1. SI2出土土器(2) |
| | 2. SI1・2完掘状況 (西から) | | 2. SI3出土土器(1) |
| PL.22 | 1. SI3完掘状況 (東から) | PL.38 | SI3出土土器(2) |
| | 2. SI3遺物出土状況 (東から) | PL.39 | SS1出土土器 |
| | 3. SI3土層断面 (北から) | PL.40 | 1. SI4出土土器 |
| | 4. SI3土層断面 (東から) | | 2. SI5、SK3・4・22出土土器 |
| PL.23 | 1. SI4完掘状況 (西から) | PL.41 | 遺構外出土土器(1) |
| | 2. SI4遺物出土状況 (北から) | PL.42 | 遺構外出土土器(2) |
| | 3. SI4土層断面 (北西から) | PL.43 | 遺構外出土土器(3) |
| | 4. SI4管玉素材出土状況 (西から) | PL.44 | 遺構外出土土器(4) |
| | 5. SI4出土高坏 | PL.45 | 1. 絵画土器・土製品 |
| PL.24 | 1. SI5完掘状況 (南から) | | 2. 遺構外出土土器(5) |
| | 2. SI5東西ベルト土層断面 (南から) | | 3. 遺構外出土土器(6) |
| | 3. SI5遺物出土状況 (東から) | | 4. 石錘 |
| PL.25 | 1. SS1完掘状況 (西から) | PL.46 | 1. 石鏃製作関連資料 |
| | 2. SS1東西ベルト土層断面 (北から) | | 2. 玉作関連遺物・砥石 |
| PL.26 | SB1完掘状況 (西から) | PL.47 | 1. 砥石 |
| PL.27 | 1. SB2完掘状況 (南から) | | 2. 磨製石斧 |
| | 2. SK8土層断面 (西から) | PL.48 | 敲石 |
| | 3. SK8完掘状況 (西から) | PL.49 | 台石 |
| | 4. SK12土層断面 (北から) | PL.50 | 1. 鉄器 |
| PL.28 | 1. SK15土層断面 (南から) | | 2. 鉄器X線写真 |
| | 2. SK15完掘状況 (南から) | | |

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

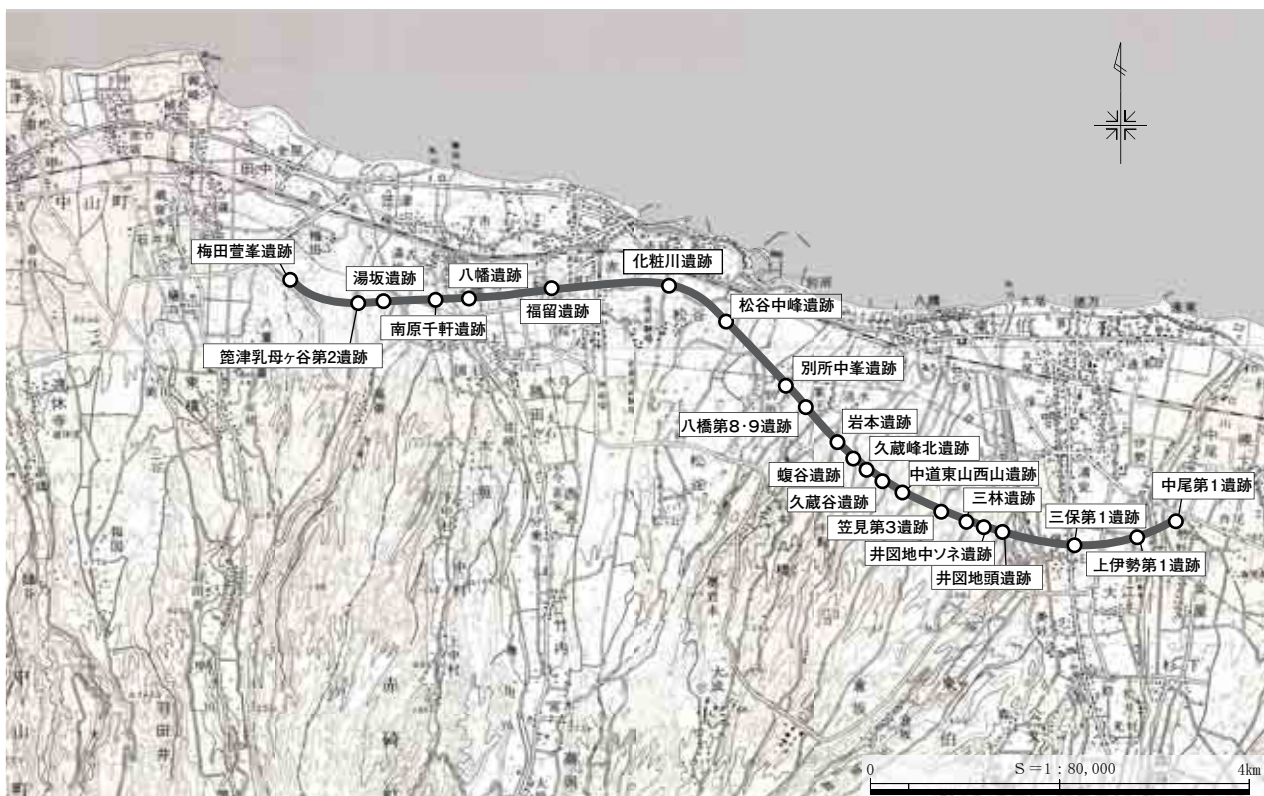
山陰地方を東西に貫く国道9号線は、交通混雑の緩和を図ることに加え、将来の国土幹線道路としての役割を果たすべく、山陰自動車道の整備事業が進められている。鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画され、一部供用開始された区間もある。

このうち東伯中山道路の計画地内には多数の遺跡があり、平成11年度からの地元教育委員会による試掘調査を経て、平成14年度から本格的な発掘調査が行われている。その延べ面積は平成18年度末現在で約215,000㎡となっている（図1、表1）。

梅田萱峯遺跡は、平成13年度に赤碕町（現琴浦町）教育委員会による試掘調査が行われた（註1）。試掘調査では、弥生時代中期の土器とともに、竪穴住居、掘立柱建物、土壙墓が検出され、当該期の集落遺跡であることが判明した。

この結果を受けて、国土交通省倉吉河川国道事務所と鳥取県教育委員会が遺跡の取り扱いに関する協議を行い、文化財保護法に基づく手続きを経て、平成17年度から鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った。

平成17年度は広域農道北側の丘陵尾根部と広域農道南側の一部を調査し、弥生時代中期後葉の竪穴建物10棟、掘立柱建物4棟、土壙墓15基などが検出され、当該期における集落景観が明らかとなるなど貴重な成果が得られた。広域農道北側丘陵の北東側斜面部は当初調査対象ではなかったが、遺物包含層が存在することが確認され、また丘陵西側尾根部で一部未買収地であった部分についても調査実施の見通しが立ったため、この2ヶ所、延べ4,450㎡を平成18年度に調査することとなった。また広



第1図 東伯中山道路ルートと関係遺跡位置図

表1 東伯中山道路関係の調査一覧

調査年度	遺跡名	所在地	調査面積	
平成14年度	井岡地頭遺跡	東伯郡琴浦町大字三保字下滝峯平ほか	6,000㎡	
	井岡地中ソネ遺跡	東伯郡琴浦町大字田越字井岡地中ゾネ	12,000㎡	
	笠見第3遺跡	東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平ほか	16,206㎡	
	笠見3号墳	東伯郡琴浦町大字田越字岩屋峯		
平成15年度	笠見第3遺跡	東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平ほか	6,900㎡	
	八橋第8・9遺跡	東伯郡琴浦町大字八橋字西二本松	11,732㎡	
	井岡地頭遺跡	東伯郡琴浦町大字三保字下滝峯平ほか	288㎡	
	三林遺跡	東伯郡琴浦町大字田越字新三林	8,408㎡	
	久蔵峰北遺跡	東伯郡琴浦町大字八橋字龍王頭	11,831㎡	
	蝮谷遺跡	東伯郡琴浦町大字蝮谷	3,705㎡	
	岩本遺跡	東伯郡琴浦町大字岩本	458㎡	
	中尾第1遺跡	東伯郡琴浦町大字中尾字荒木田ほか	28,696㎡	
	別所中峯遺跡	東伯郡琴浦町大字別所字中峯	3,175㎡	
	松谷中峰遺跡	東伯郡琴浦町大字松谷字中峰	7,473㎡	
	平成16年度	上伊勢第1遺跡	東伯郡琴浦町大字上伊勢字東松山	7,523㎡
		三保第1遺跡	東伯郡琴浦町大字三保字一本木	1,071㎡
久蔵谷遺跡		東伯郡琴浦町大字笠見字加杖阪	3,245㎡	
化粧川遺跡		東伯郡琴浦町大字赤碕字小谷堤ノ上	6,672㎡	
八幡遺跡		東伯郡琴浦町大字八幡字八幡ノ後口ほか	11,929㎡	
南原千軒遺跡		東伯郡琴浦町大字光字壺本松ほか	2,917.0㎡	
中道東山西山遺跡		東伯郡琴浦町大字笠見字中道東山上	13,244㎡	
福留遺跡		東伯郡琴浦町大字赤碕字畑ノ東	4,030㎡	
湯坂遺跡		東伯郡琴浦町大字湯坂字ヒイガ谷東平	4,895㎡	
梅田萱峯遺跡		東伯郡琴浦町大字梅田字萱峯	6,350㎡	
平成17年度	籠津乳母ヶ谷第2遺跡	東伯郡琴浦町大字籠津字赤坂谷平ほか	4,500㎡	
	南原千軒遺跡	東伯郡琴浦町大字光字大加布毛ほか	1,500㎡	
	梅田萱峯遺跡	東伯郡琴浦町大字梅田字萱峯	5,450㎡	
平成18年度	籠津乳母ヶ谷第2遺跡	東伯郡琴浦町大字籠津字赤坂谷平ほか	8,914㎡	
	笠見第3遺跡	東伯郡琴浦町大字笠見字東神楽平ほか	16,600㎡	
	計		215,712㎡	

域農道南側については平成19年度調査予定であったが、その一部1,000㎡を平成18年度に調査することとなった。

註1) 武尾美則・石賀 太編2002『赤碕町内遺跡発掘調査報告書Ⅷ』赤碕町教育委員会



第2図 調査地位置図

第2節 調査の経過と方法

(1) 調査区の名称

調査の都合上、調査区をいくつかに分けた。遺跡は広域農道により南北に分断されている。このうち北側を1区、南側を2区とし、2区の南東に位置する浅い谷を隔てた丘陵上を3区とした(第2図)。

1区はさらに細分され、丘陵平坦部の大部分を占める1-A区と、その西に隣接する未買収地であった1-B区、丘陵北東側斜面部の1-C区とそれぞれ命名している。

平成17年度調査は1-A区と3区を、平成18年度調査は1-B区、1-C区及び2区の一部を、それぞれ調査した(註2)。

(2) 調査の方法

遺跡を覆う表土は重機により除去し、遺構や遺物包含層などの掘り下げは人力で行い、調査により生じた排土は隣接地に仮置きした。

調査はグリッド法により行い、基準杭を公共座標第V系に基づき10m間隔で設定した。基準杭には南北軸には算用数字を東から、東西軸

にはアルファベットを北からそれぞれ付した。

検出した遺構や遺物は、原則として光波トランシットにより記録した。出土遺物は時期判断が可能なものについては出土位置を記録し、それ以外は遺構またはグリッド毎に一括して取り上げた。写真撮影は35mm判と6×7判フィルムを使用し、適宜デジタルカメラにより補足した。

(3) 3区の調査経過

3区は55m×22mの範囲で、丘陵尾根部と東西の谷部を含む範囲である。

平成17年4月11日に調査前航空写真撮影にかかる委託契約を締結し、調査を開始した。4月14日に航空写真撮影を実施し、4月20日から22日にかけて表土剥ぎを行った。その後4月27日に委託業者による現地での方眼測量を行った。発掘作業員の稼働は大型連休後となり、休憩テントの設営など周辺整備を含め5月9日から本格的な発掘作業に入った。

遺構の埋土は地山と似ていたため、遺構の検出は容易ではなく、何度か精査を繰り返したり、適宜サブトレンチを設定し遺構の確認に努めた。また西側谷部では掘削土量も多く、遺物も多量に出土したため取り上げに追われることとなった。

調査では弥生時代の竪穴建物5棟のほか、県内でも類例の少ない独立棟持柱を持つ掘立柱建物が発見されたため、7月2日に現地説明会を予定したが、荒天のため中止となった。

7月12日に委託業者による調査後地形測量を行い、7月22日に遺構の測量作業を終え、いったん現地から離れた。この後、8月2日に近隣で調査をしていた筥津乳母ヶ谷第2遺跡と合わせ航空写真撮影を行った。

(4) 1区の調査経過

1-B区は南北約70m、東西約5～10mの細長い調査区であり、尾根の傾斜変換点に当たり、西に向かって緩やかに下っている。1-C区は、南北約50m、東西約45mの扇形の調査区であり、北東方向に二股状に突き出た小尾根に挟まれた谷地形となっている。ここは尾根部から谷底部までの比高差が約15m、地形の勾配が20～30度と大きく、安全面など考慮すると困難な調査になるであろうことが予想された。

平成18年4月3日に調査前測量の委託契約を締結し、調査を開始した。4月10日から17日にかけて表土剥ぎを行い、4月3日から19日に委託業者による現地での基準点測量及び方眼測量を行った。4月25日、休憩テントの設営や安全対策として調査区際に階段を造成するなど周辺整備を開始し、翌日から本格的な遺構検出作業に入った。

調査は1-B区の遺構検出作業から始めた。包含層は比較的薄いのが、平成17年度調査で検出された竪穴住居の続きや段状遺構、落とし穴、貯蔵穴などが検出された。

1-C区は斜面中位にベルトコンベアーを設置し、まず北尾根部斜面上方の掘り下げを行った。斜面上方では土坑やピットなどが散見されたほか、谷部では弥生時代から古代に至る包含層が大きく2層にわたって堆積していることが明らかとなった。谷中心部では弥生時代中期後葉の土器溜まりが1ヶ所確認された。また、南尾根部上方でも同時期の遺物集中箇所が発見され、精査を行ったところ貯蔵穴を付設する竪穴住居であることがわかった。

斜面下方は包含層が部分的に乱れている状況が確認されつつも、ほぼ完形品となる須恵器の壺や坏身などが発見されている。斜面部の調査は、脚を踏ん張りながらの作業であり、谷部は約30cmの包含層掘り下げという状況で、夏の暑さも加わり作業は困難を伴った。

6月28日に調査地の全景写真撮影を行い、30日発掘資材の撤収、その後測量調査を行って7月7日に現地から撤収した。発掘調査報告書作成に伴う整理作業は、埋蔵文化財センター調査第一係（東伯調査事務所）で行った。

調査成果は平成17年度から積極的に情報発信し、埋蔵文化財センターのホームページで速報的に紹介した。また東伯中山道路関係の発掘調査について紹介する「発掘調査だより」を作成し、琴浦町内の小中学校に毎月配布したり、琴浦町報に遺跡紹介記事を掲載するなど、地元への普及啓発活動を行った。平成18年5月31日には地元小学生9名が発掘作業を見学に訪れた。

註2) 1-A区の調査成果は下記文献で報告済。2区については平成19年度に報告書刊行予定である。

高尾浩司・浅田康行 編2007『鳥取県埋蔵文化センター調査報告書11 梅田萱峯遺跡1』鳥取県埋蔵文化センター

第3節 調査体制

下記の体制で発掘調査・報告書作成を行った。

鳥取県埋蔵文化財センター

平成17年度

所 長 田中 弘道
次 長 戸井 歩(兼総務係長)
総務係
副 主 幹 福田 高之

発掘事業室

室 長 加藤 隆昭(兼調整係長)
調整係
文化財主事 八峠 興
調査第一係
係 長 湯村 功
文化財主事 小口英一郎

平成18年度

所 長 久保穰二郎
次 長 戸井 歩(兼総務係長)
総務係
副 主 幹 福田 高之

発掘事業室

室 長 加藤 隆昭(兼調整係長)
調整係
文化財主事 濱 隆造
調査第一係
係 長 湯村 功
文化財主事 恩田 智則
文化財主事 濱本 利幸
文化財主事 小口英一郎
調査員 築谷 具成

第2章 遺跡の位置と環境

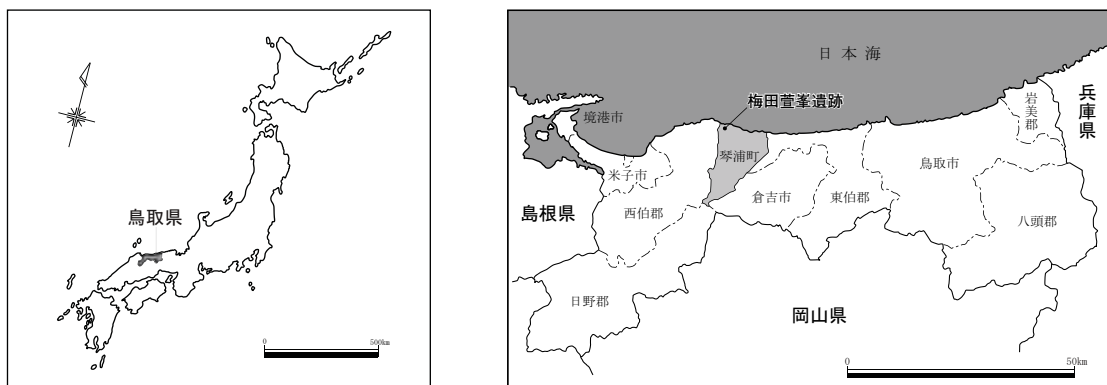
第1節 地理的環境

梅田萱峯遺跡が所在する琴浦町は、鳥取県中部地域の西端に位置する。平成16年9月1日に東伯町と赤碕町が合併して新町として誕生した。県庁所在地の鳥取市からは西に約60km、県西部の商都米子市からは東に約35km離れている。町域は大山山麓から北に向かって広がる三角形で、東は北栄町、倉吉市と、西は大山町と、南は江府町と、北は日本海と接する。東西15.2km、南北18.5km、総面積は139.88km²を測る。平成18年12月時点の人口は、20,201人である。

地勢は、大山山麓から派生する急峻な丘陵地が北に向かうほど緩やかとなり、町内を南北に流れる加勢蛇川、洗川、勝田川などの流域に平野部が広がっている。海岸線は単調であるが、良好な漁場となっている。

町の産業は日本海沿岸部と山間部、その中間部にそれぞれ特徴がある。日本海沿岸部は国道9号線沿いを中心に、地酒、地ビール、和牛といった酒造や食品製造などの商工業が盛んである。また海岸部は赤碕港を中心とした沿岸漁場が有名である。中間部は県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、二十世紀梨は海外へも輸出されている。山間部は大山滝や南北朝期の動乱を描いた「太平記」の舞台となった船上山、国指定天然記念物の伯耆の大シイなどの風光明媚な自然に囲まれ、多くの観光客が訪れている。

梅田萱峯遺跡は町の北西部、旧赤碕町域に位置する。日本海までは直線距離で約1kmである。南側山塊から派生する丘陵先端付近に立地し、標高は50mから60mを測る。



第3図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

ここでは琴浦町内を中心とした遺跡の概要を述べる。

旧石器・縄文時代 鳥取県下の旧石器資料は15遺跡で確認されており、位置づけがはっきりしない尖頭器類を含めても40遺跡を数えるに過ぎない。町内では三林遺跡（6）と梅田萱峯遺跡（22）でナイフ形石器の可能性のある資料が、笠見第3遺跡（7）で細石核の可能性のある資料が、本来の位置を遊離した状態で出土している。また水溜、松谷の両地点で槍先形尖頭器が採集されており、住吉第2遺跡（99）では有舌尖頭器が出土している。

縄文時代については、集落像を明らかにしうる調査例は少ない。早期のものとしては、赤坂後口山遺跡（93）、退休寺飛渡り遺跡（101）、上伊勢第1遺跡（2）で押型文土器が検出されている。中期以前では、松ヶ丘遺跡（66）、森藤第1・2遺跡（37）、井岡地中ソネ遺跡（5）、井岡地頭遺跡（4）

などで土器が出土している。後期段階では森藤第2遺跡と南原千軒遺跡（19）で石囲い炉をもつ竪穴住居跡が検出されている。森藤第2遺跡では、住居内から土器のほか土器片錘、打ち欠き石錘、土偶が出土している。南原千軒遺跡でも遺構外から土偶が出土しており、今朝平タイプの可能性が考えられている。仮にそうであれば、同タイプの日本海側における分布の西限例となりうる。このほか後期から晩期の遺跡として、八重第1遺跡（81）、八重第3遺跡（83）、小松谷遺跡（97）、下甲抜堤遺跡（96）がある。

弥生時代 当地域の弥生開始期の様相は明らかではない。前期から中期前半については、近年の低地部の調査でこの時期の集落の一端が見え始めている。上伊勢第1遺跡では前期の竪穴住居跡が3棟確認され、中尾第1遺跡（1）と三保第1遺跡（3）では同時期の配石墓や土壙墓などの墓域が調査されている。これらの遺跡は加勢蛇川を挟んだ沖積平野内の微高地上に近接して存在している。南原千軒遺跡は勝田川沿いの扇状地上に位置し、中期初頭の土器が大量に出土している。また中尾第1遺跡は中期中葉の集落でもある。

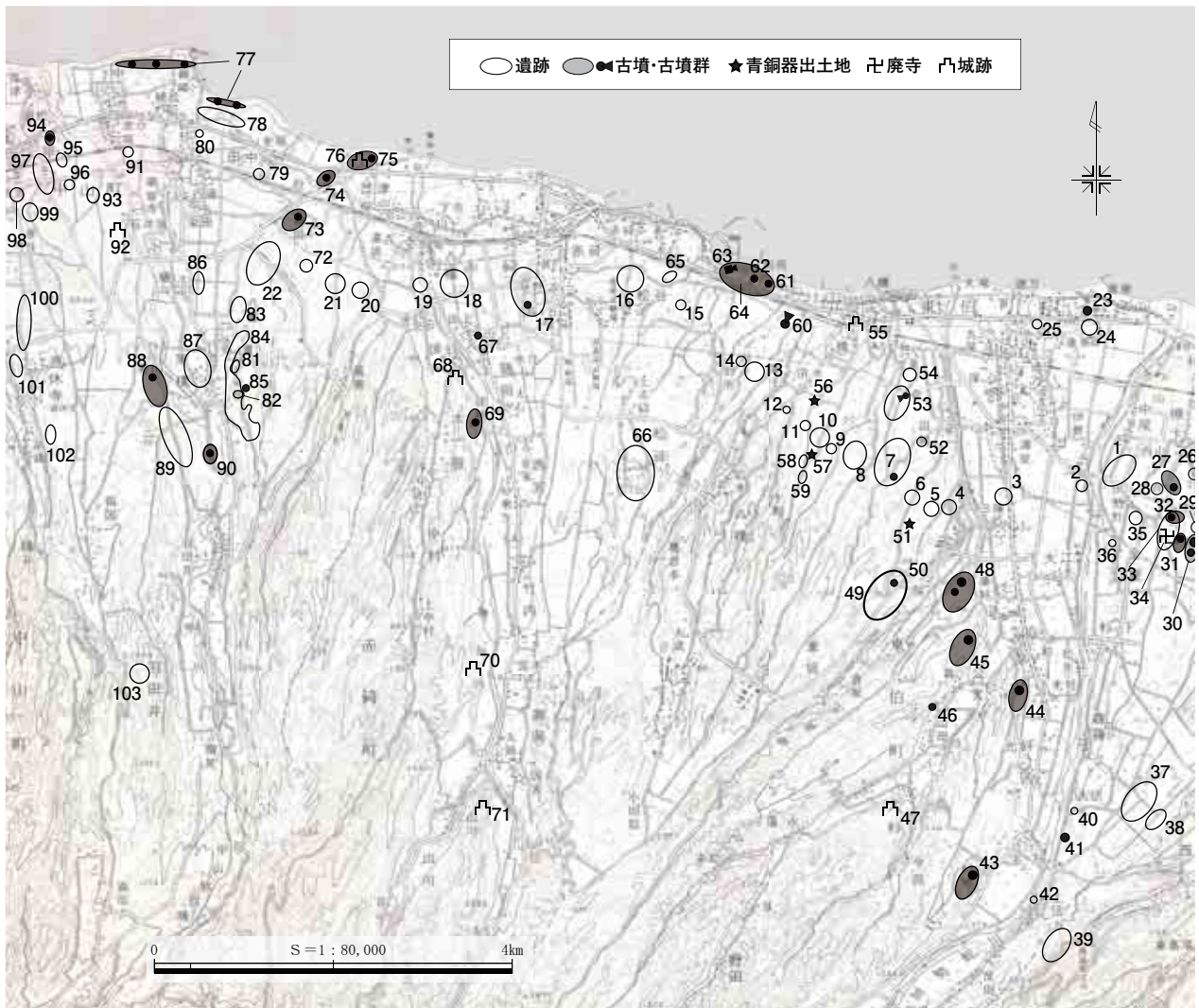
中期後半から古墳時代初頭にかけては、丘陵上を舞台として集落が大きく展開する。森藤第1遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡、大峰遺跡（38）、井岡地中ソネ遺跡、三保遺跡（49）、笠見第3遺跡、三林遺跡、中道東山西山遺跡（8）、久蔵峰北遺跡（10）、福留遺跡（17）、筥津乳母ヶ谷第2遺跡（21）など枚挙に暇がない。本報告の梅田萱峯遺跡は中期後葉を中心とした遺跡で、未調査の範囲を含めると大規模な集落である可能性がある。住居内から磨製石剣の完存品も出土している。退休寺遺跡（100）も同じ時期で、竪穴住居をはじめ掘立柱建物、土壙墓が確認されている。住居内から分銅形土製品が出土し、柱を抜き取った柱穴内から甕が出土していることから、廃棄時の祭祀的行為が想定されている。多数の住居跡が調査された例から見ると、後期半ばから後半にかけて住居等が激増する様子が窺える。

各種生産に関しては、玉作遺跡の調査例が増えている。南原千軒遺跡では中期初頭から後期までの土器を含む溝から施溝分割技法による管玉素材が多数出土している。また軟質な石材を用いて板状素材から施溝分割する「西川津技法」と同様なものがある点も注目される。笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡では後期の玉作工房が検出されている。笠見第3遺跡では後期前半に属する管玉素材のひとつに島根県花仙山産の緑色凝灰岩が使用されていることが判明したほか、管玉の穿孔に鉄針が用いられていたことがわかる例もあった。笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡ともに後期段階では施溝分割は行わず、打撃分割によっている。笠見第3遺跡では赤色顔料が付着した石杵、石皿が多数出土している。

墳墓では墓ノ上遺跡（65）、別所女夫岩峯遺跡（61）で中期の木棺墓が見つかった。湯坂遺跡（20）では後期の小型の墳丘墓を増築した例があり、山陰地方では珍しい鉄石英製の管玉が副葬されていた。井岡地中ソネ遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の区画溝を伴う土壙墓群が検出されている。

町内では銅鐸、銅矛、銅剣が出土している。八橋（56）では扁平鈕I式銅鐸のほか、同一丘陵（57）で銅矛も見つかっている。また田越（51）では円墳の箱式石棺下30cmの位置から中細形銅剣が4本出土している。

古墳時代 町内には4基の前方後円墳がある。別所1号墳（笠取塚古墳、53m）（63）、八橋狐塚古墳（町史跡、62m）（60）、大塚古墳（34m）、竜ヶ崎3号墳（21m）（48）で、このうち前期に属すると思われるのは別所1号墳である。



1. 中尾第1遺跡、2. 上伊勢第1遺跡、3. 三保第1遺跡、4. 井岡地頭遺跡、5. 井岡地中ソネ遺跡、6. 三林遺跡、7. 笠見第3遺跡、8. 中道東山西山遺跡、9. 久蔵谷遺跡、10. 久蔵峰北遺跡、11. 蝮谷遺跡、12. 岩本遺跡、13. 八橋第8・9遺跡、14. 別所中峯遺跡、15. 松谷中峰遺跡、16. 化粧川遺跡、17. 福留遺跡、18. 八幡遺跡、19. 南原千軒遺跡、20. 湯坂遺跡、21. 筧津乳母ヶ谷第2遺跡、22. 梅田董峯遺跡、23. 逢東双子塚古墳、24. 逢東遺跡、25. 逢東第2遺跡、26. 槻下豪族居館跡、27. 槻下古墳群、28. 下斎尾2号遺跡、29. 大高野遺跡、30. 大高野古墳群、31. 塚本古墳群、32. 斎尾古墳群、33. 下斎尾1号遺跡、34. 斎尾廃寺、35. 伊勢野遺跡、36. 金屋経塚、37. 森藤第1・2遺跡、38. 大峰遺跡、39. 西高尾谷奥遺跡、40. 大法古瓦出土地、41. 大法3号墳、42. 上法万経塚、43. 杉地古墳群、44. 下光好古墳群、45. 公文古墳群、46. 山田1号墳、47. 妙見山城跡、48. 竜ヶ崎古墳群、49. 三保遺跡、50. 三保6号墳、51. 田越銅剣出土地、52. 田越第4遺跡、53. 笠見第2遺跡・笠見1号墳、54. 笠見第1遺跡、55. 八橋城跡、56. 八橋銅鐸出土地、57. 久蔵峰銅矛出土地、58. 八橋第2遺跡、59. 八橋第4遺跡、60. 八橋狐塚古墳、61. 別所女夫岩峯遺跡、62. 別所2号墳、63. 別所1号墳(笠取塚古墳)、64. 別所古墳群、65. 墓ノ上遺跡、66. 松ヶ丘遺跡、67. 出上岩屋古墳、68. 倭山城跡、69. 太一垣古墳群、70. 大仏山城跡、71. 山川城跡、72. 梅田所在遺跡、73. 梅田(栄田)古墳群、74. 坂ノ上古墳群、75. 筧津古墳群、76. 筧津城跡、77. 御崎古墳群、78. 御崎第1遺跡、79. 田中川上遺跡、80. 御崎第2遺跡、81. 八重第1遺跡、82. 八重第2遺跡、83. 八重第3遺跡、84. 八重第4遺跡、85. 岩屋平ル古墳、86. 樋口第1遺跡、87. 樋口第2遺跡、88. 三谷古墳群、89. 三谷遺跡、90. 東積古墳群、91. 赤坂大五輪塔、92. 岩井垣城跡、93. 赤坂後口山遺跡、94. 曲松古墳群、95. 林之峯遺跡、96. 下甲坂堤遺跡、97. 小松谷遺跡、98. 住吉第1遺跡、99. 住吉第2遺跡、100. 退休寺遺跡、101. 退休寺飛渡り遺跡、102. 退休寺第1遺跡、103. 羽田井遺跡

第4図 周辺遺跡分布図

中期から後期にかけては群集墳が築かれる。大高野古墳群(30)、塚本古墳群(31)、斎尾古墳群(32)、公文古墳群(45)、竜ヶ崎古墳群(48)、別所古墳群(64)、筧津古墳群(75)、坂ノ上古墳群(74)、梅田古墳群(73)などである。大高野3号墳では金銅製耳環、青銅製鈴、鉄刀などが副葬されていた。中期後半の高塚古墳は現在は消滅しているが、朝顔形埴輪、形象埴輪などが出土している。後期以降採用される横穴式石室には、大法3号墳(41)、三保6号墳などのように竪穴系横口石室と呼ばれる構造をもつものがある。槻下古墳群(27)、大高野古墳群、塚本古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形態もその系譜に連なるものであることから、加勢蛇川流域に石室形態を同じくする集団が存在したことを示している。終末期に属すると思われる切石積石室は山田1号墳(町史跡)(46)、出上岩屋古墳(県史跡)(67)に認められる。

集落の様相は不明な部分が多い。三保遺跡、上伊勢第1遺跡、笠見第3遺跡、蝮谷遺跡(11)、三

林遺跡、久蔵峰北遺跡、中尾第1遺跡、三保第1遺跡、松谷中峰遺跡（15）、井岡地中ソネ遺跡、別所中峯遺跡（14）、八重第3遺跡、住吉第2遺跡など集落遺跡の調査例は多いが、実態は必ずしも明らかではない。そのような中で注目されるのは笠見第3遺跡と八橋第8・9遺跡（13）である。笠見第3遺跡では今のところ県内最古例となる中期末の鍛冶炉が検出された。鉄床石や羽口など鍛冶関連遺物も出土している。八橋第8・9遺跡では6世紀から7世紀代の竪穴住居跡23棟などが調査されたほか、椀形鍛冶滓なども出土している。籠津乳母ヶ谷第2遺跡では丘陵斜面を造成した段状遺構が、古墳時代後期から奈良時代にかけて多数築かれている。そのうち1棟は鍛冶炉を伴っていた。

古代 町内には山陰地方唯一の国特別史跡である斎尾廃寺（34）がある。金堂や塔、講堂跡が残り、これらを取り囲む土塁状の高まりも存在する。伽藍配置は法隆寺式である。斎尾廃寺が位置する加勢蛇川右岸は伯耆国八橋郡の中心地であったと推定され、近くには出土した炭化米を根拠に正倉または郷倉と考えられる総柱礎石建物群がある大高野遺跡（29）や伊勢野遺跡（35）、水溜り・駕籠据場遺跡といった掘立柱建物群や墨書土器を伴う遺跡がある。やや南には墨書土器や金属器写しの須恵器が出土した森藤第1・第2遺跡、大法古瓦出土地（40）がある。このほか、旧籠津郷に位置する八幡遺跡（18）では掘立柱建物群や赤色塗彩土師器が多数出土している。田中川上遺跡（79）では埋没河川が確認され、その川辺の一部から須恵器や赤色塗彩の土師器が集中して投棄された状態が検出されており、川辺での祭祀行為が想定されている。

墳墓の関係では、笠見第3遺跡と三林遺跡で火葬墓が見ついている。笠見第3遺跡では土坑を掘り蔵骨器と考えられる土師器坏と火葬骨を木櫃に納めていた。三林遺跡では土坑を掘った中に石槨を設け、その中に土師器を組み合わせた蔵骨器に火葬骨を納めていた。金屋（36）と上法万（42）では経塚が見つかり、金屋では銅経筒が納められていた。

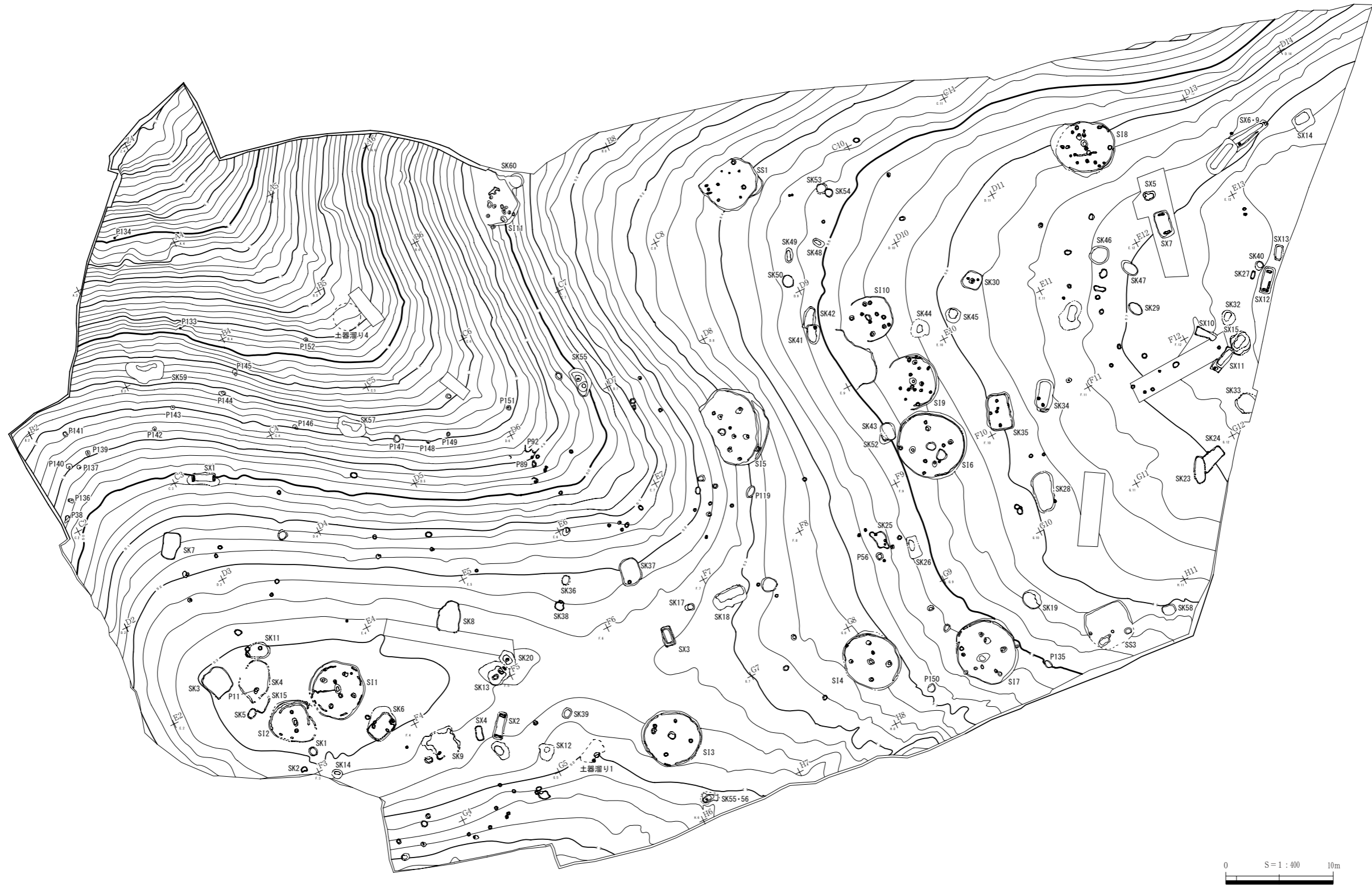
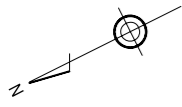
生産関係では、上伊勢第1遺跡で9世紀から13世紀と考えられる畠跡が見つかり、中道東山西山遺跡では9世紀代に位置づけられる鍛冶炉などの鉄関連遺構や遺物が検出されている。

中世 南原千軒遺跡では平安後期の鍛冶関連遺構や遺物が大量に出土した。鍛冶炉や廃棄土坑のほか鉄滓や鍛造剥片などの微細遺物も豊富で、鉄素材から製品まで生産していたと考えられる。

井岡地頭遺跡では平安時代末頃の方形区画溝が検出されている。内部には道路状の硬化面や礎石とおぼしき礫があり、居館跡の可能性もある。槻下館跡（町史跡）（26）は40m四方の主郭のほか、周囲に土塁や壕を巡らせた郭をもつ複郭式と考えられる。鎌倉時代に岩野弾正の居城であったと伝えられるが詳細は不明である。

町南部には標高615mの船上山がそびえる。ここには南北朝期に後醍醐天皇が隠岐から逃れた行宮跡（国史跡）がある。赤碕港から船上山にかけては、鎌倉末期と推定される、宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせもつ独特の形態の赤碕塔（県保護文化財）があることでも知られている。

中世城館は町内各地に見られる。南北朝期に西伯耆で勢力をもっていた行松氏が築城し、後に毛利氏が支配し伯耆の経営拠点となった八橋城跡（町史跡）（55）、天正年間の築城と考えられる妙見山城跡（47）、土塁と堀が残る町史跡の籠津城（楨城）跡（76）のほか、條山城跡（68）、大仏山城跡（70）、山川城跡（71）がある。



第5図 1区遺構配置図

第3章 調査の成果（1区）

第1節 遺跡の立地と層序

今回の調査地は平成17年度調査地の北東および西に隣接し、調査前は植林地であった。この一帯は大山火山噴出物によって形成された丘陵地であり、調査地の土層は大山を噴出源とする火山灰堆積である。調査地ではクロボクは未発達であり、その下部に堆積する弥生時代～古代の包含層と上～中部火山灰層が確認された。

調査地の基本層序は、1-B区については平成17年度調査地と基本的に同一である。したがって表土をⅠ層、遺物包含層をⅡ層とする前回報告を踏襲した（註1）。1-C区は斜面地であり、二次堆積土なども存在することから、尾根部層位との整合を計りながら以下に概要を記す。

- Ⅰ層：黒褐色土（表土）。10～15cmの厚さで全体を覆う。植林のためか、細かな根が多く張り、しまりが弱い。
- Ⅱ-①層：暗褐色土。主に谷筋上方に広く堆積する。径2cm以下の炭化物、焼土粒、地山ブロックを多く含んでいる。しまり・粘性ともに弱い。包含される遺物は、須恵器や土師器など律令期のものが散見され、客体的に弥生時代中期後葉の遺物が混入している。
- ②層：黒褐色土。土器溜り付近に部分的に堆積する。径5cm以下の炭化物や1cm大の焼土粒を多く含む。弥生時代中期後葉の遺物を包含する。
- ③層：暗褐色土。土器溜り付近に部分的に堆積する。径3cm以下の焼土粒を密に含む。弥生時代中期後葉の遺物を包含する。
- ④層：黒褐色土。土器溜り付近を中心として4m四方にわたって堆積する。径3cm以下の炭化物・焼土粒、地山ブロックを含んでいる。本層中に弥生時代中期後葉の遺物が多く含まれていた。
- ⑤層：黄褐色土。平成17年度調査の③層に対応し、斜面部から谷筋全面にわたって堆積する。径2cm以下の炭化物、焼土粒、地山ブロックを含み、①層よりもしまり強い。弥生時代中期後葉の遺物を含む。
- Ⅲ-①層：黄褐色土。斜面部から谷筋にかけて安定的に堆積するローム層。径3～5cm大の礫を含む。Ⅱ-⑤層と同色調であるが、しまり・粘性が強い。本層以下が無遺物層である。
- ②層：Ⅲ層の二次堆積層であり、谷部下半に部分的に堆積する。
- Ⅳ-①層：黒褐色土。斜面部のみに堆積するローム層。径2cm大の小礫を含み、しまり・粘性強い。
- ②層：黄褐色土。Ⅳ-①層の二次堆積層であり、谷部下半に部分的に堆積する。
- Ⅴ層：暗褐色土。谷部下半に堆積するローム層。径3cm以下の黄色・赤色スコリア、パミスを含む。しまり・粘性強い。
- Ⅵ層：黒色土。谷部下半に堆積するローム層。径3cm以下の黄色・赤色スコリア、パミスを含む。しまり・粘性強い。
- Ⅶ層：黄褐色土。谷部に堆積するローム層。径5cm以下の小礫を含む。しまり・粘性強い。
- なお、Ⅴ～Ⅶ層は谷部のみ堆積するローム層で、二次堆積の可能性がある。

註1) 高尾浩司・浅田康行編2007『鳥取県埋蔵文化財センター調査報告11 梅田萱峯遺跡1』鳥取県埋蔵文化財センター



第6図 1-C区土層断面図(1)



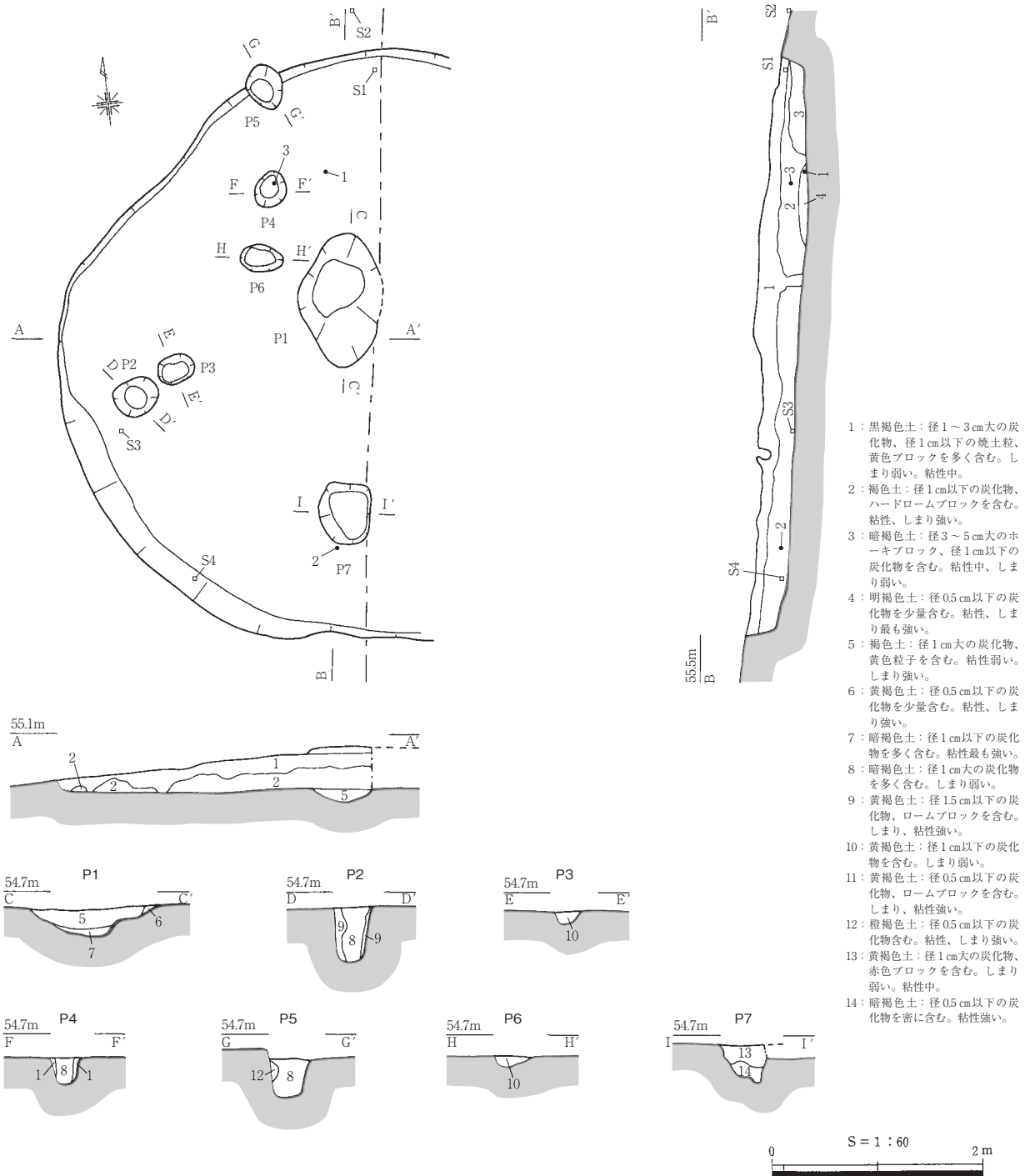
第7図 1-C区土層断面図(2)

第2節 調査の成果

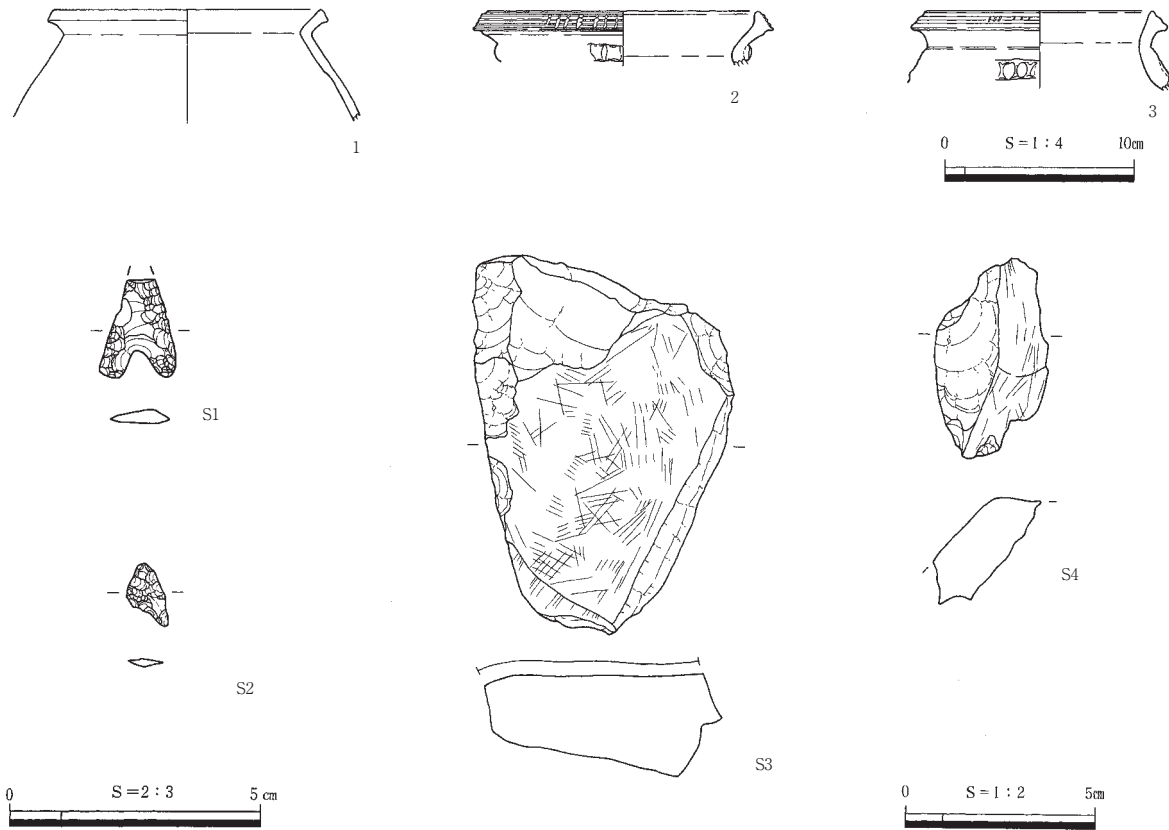
(1) 概要

1-B・C区からは弥生時代中期後葉における竪穴住居2棟、段状遺構1棟、貯蔵穴2基、土器溜り1ヶ所を検出した。このなかで、1-B区に位置するSI 7は平成17年度調査の続きであり、その全容が明らかとなった。また、1-C区のSI11は斜面上に築かれた竪穴住居であり、奥壁に貯蔵穴を伴っていた。時期不明の遺構として、製炭土坑であるSK58や落とし穴SK55が検出された。

1-C区の谷部では弥生中期後葉の包含層が約30cmの厚さで堆積しており、中心部付近から土器溜りが確認された。また、律令期の包含層が残存しており、斜面地から谷部にかけて完形の土師器や須



第8図 SI7



第9図 SI7出土遺物

表2 SI7出土土器観察表

遺物No	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	取上No	備考
1	SI7埋土	弥生土器 甕	※12.0 △4.1	口縁～頭部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頭部貼付突帯 内面：口縁ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良好	1253・1254・1255・1264	
2	SI7埋土	弥生土器 甕	※14.3 △2.9	口縁～頭部 破片	外面：口縁部4条凹線文、頭部貼付突帯 内面：口縁部ナデ、体部ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄橙色 内面：橙～オリブ黒色	良好	1285	
3	SI7埋土	弥生土器 甕	※14.2 △5.8	口縁～体部 破片	外面：口縁～体部風化により調整不明 内面：口縁～体部風化により調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	良好	1252	

表3 SI7出土石器観察表

No	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上No
S1	第9図 PL.16	SI7	石鎌	黒曜石	※1.95	1.5	0.3	0.9	1203
S2	第9図 PL.16	SI7	石鎌未製品	黒曜石	1.3	0.2	0.8	0.1	1199
S3	第9図 PL.16	SI7	砥石		9.9	6.3	2.9	0.22	1248
S4	第9図 PL.17	SI7	石斧		5.3	3.1	1.4	40.0	2224

恵器の壺・坏身などが見ついている。

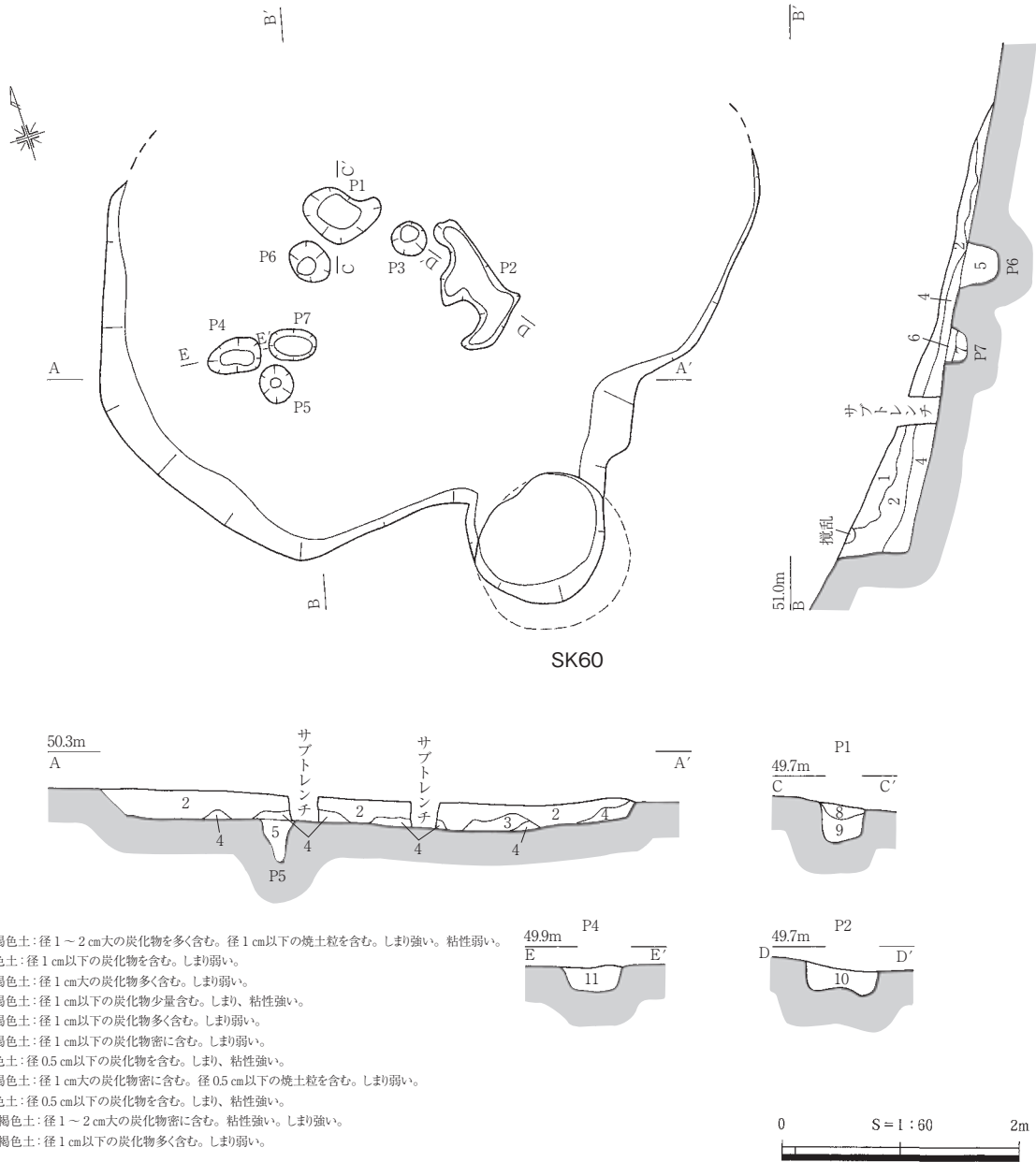
(2) 竪穴住居

SI7 (第8・9図、表2・3、PL. 2・16・17)

1-B区やや南よりG 8・9グリッドに跨って検出した。標高55m、西に向かって緩やかに下がる傾斜変換点に位置する。平成17年度調査のSI 7の続きであり、南北5.2m、東西6.2m、面積は23.7㎡である。

検出面から床面までの深さは34cm、壁面は80度の角度で外傾して立ち上がる。

主柱穴はP 2 (42×38-50.4cm) とこれに対向する昨年度調査P 2の2基と考えられ、その他P 7 (56×50-30cm) と昨年度調査のP 6などが補助柱穴の可能性がある。P 2では柱痕が観察でき、その直径は14～18cmである。中央ピットのP 1 (128×80-24cm) は、床面の中心より50cm北側に寄って



第10図 SI11

る。浅い掘り鉢状の掘り方で、埋土は2層に分かれ、下層に炭化物を多く含んでいた。

壁溝は昨年度調査の東壁で確認されているが、西側では認められなかった。これは、東から西に向かう緩斜面に立地し、西壁が低いことに起因するかもしれない。貼床は施されない。焼土面も検出されなかった。埋土は暗褐色土と褐色土の4層に分かれ、壁際から流れ込んだ状況を示し、自然堆積と考えられる。前者は、古代以降に堆積した可能性がある。

甕1は口縁部が無文であり、風化により体部の調整は不明である。2・3は口縁部に凹線文が施され、頸部に貼り付け突帯がめぐる甕である。いずれも床面に近い埋土下層から出土している。

石器は4点図示した。S1・2は凹基式の黒曜石製の石鎌・石鎌未成品であり、深い抉り特徴とする。S1は先端部が欠損し、S2は抉り部を作り出す際に脚部が欠損してしまった可能性がある。S3は細粒花崗岩製の砥石であり、砥面は1面。S4は伐採石斧の破損品である。

遺構の時期は、出土遺物からIV-1様式、弥生時代中期後葉に位置づけられる。



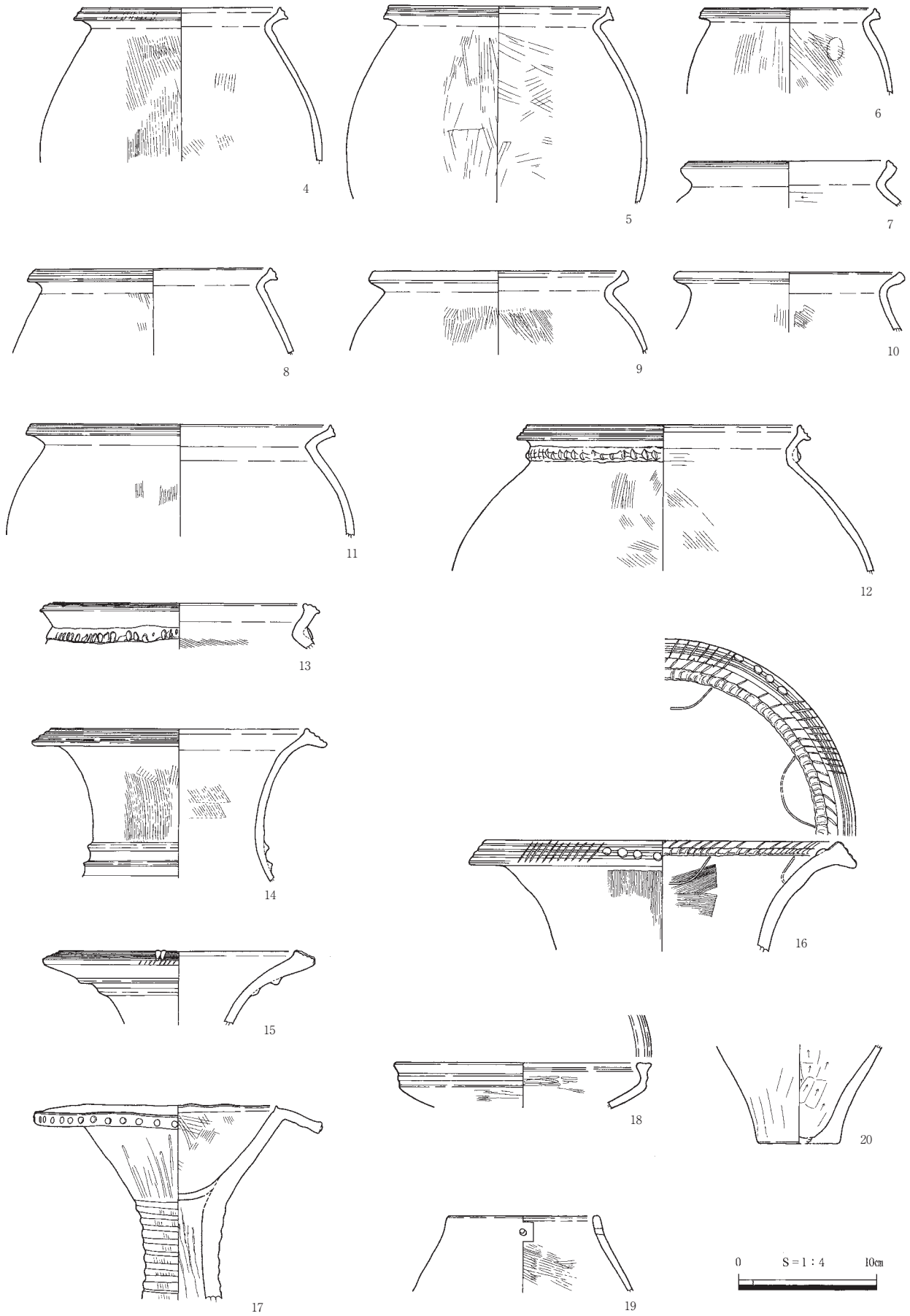
第11図 SI11遺物出土状況図

SI11 (第10～13図、表4・5、巻頭図版2、PL. 3・8～10・16)

1-C区東南、A 6・B 6グリッドに跨って検出した。標高49.7m、北東方向に延びる尾根斜面部に立地する。南壁やや東寄りに貯蔵穴SK60が付設している。

B 7杭周辺の包含層掘り下げを行っている過程で、弥生時代中期後葉の遺物が集積している状況が明らかとなり、当初は斜面部の土器廃棄場と想定した。そこで南北方向にサブトレンチを設定したところ、床面が検出されテラス状に造成した竪穴住居跡であることがわかった。

床面の平面形は不整半円形であるが、北側斜面部の床面は後世に崩落してしまった可能性があるため本来の形状は不明である。床面は、斜面部地山を削りだして整地しており、やや斜面部に向かって



第12図 SI11出土遺物(1)

下がっている。貼床、壁溝とも確認されなかった。南北3.9m、東西5.9m、現状での面積は12.2㎡である。検出面から床面までの深さは尾根側で60cm、中心部で20cm、壁面は80度の角度で外傾して立ち上がる。

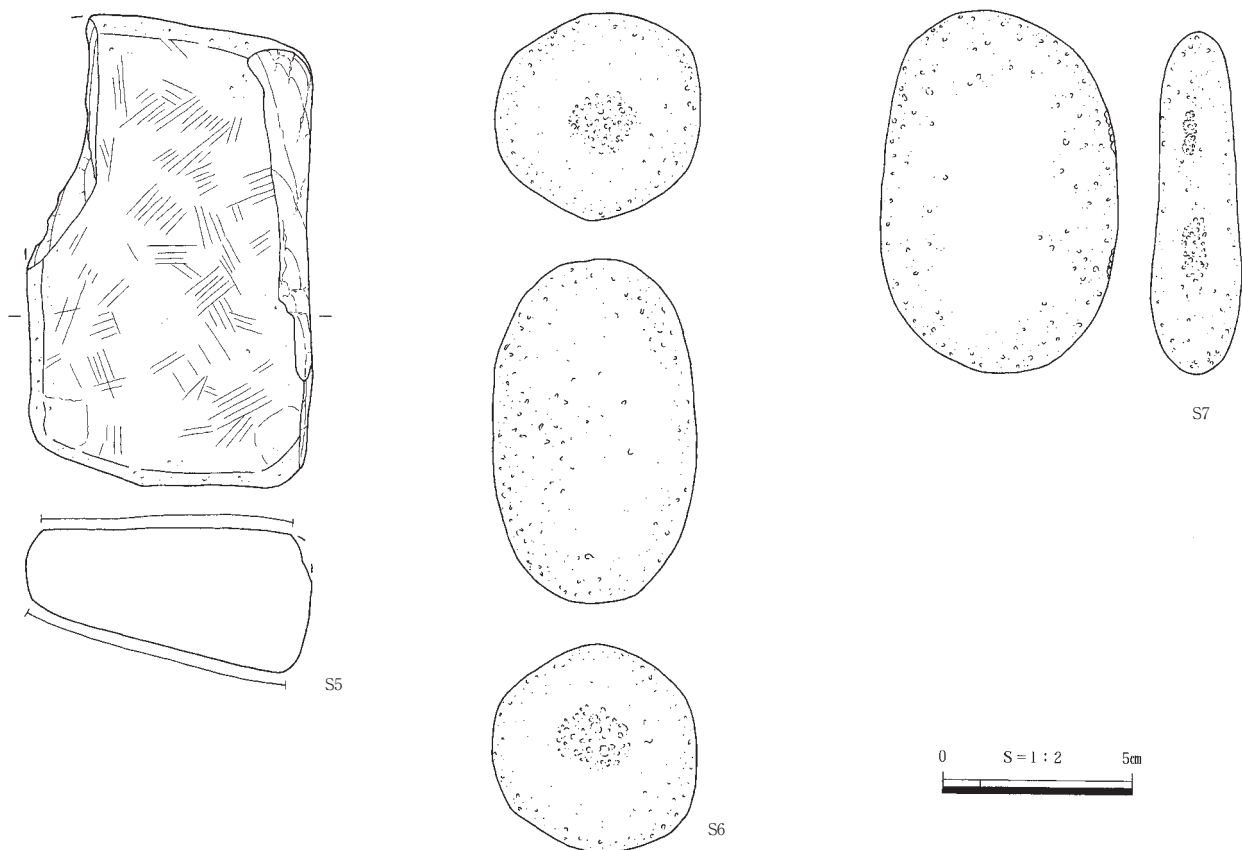
主柱穴は不明であるが、P 5 (32×28-36cm) は、その可能性があるかもしれない。床面上で検出されたピットは、いずれも不規則な配置であり明瞭な柱痕は確認されなかった。このなかで、P 2 (96×50-22cm) は南北に主軸をとる不定形なピットであるが、埋土中には多くの炭化物が含まれ粘質に富んでいたことから、中央ピットと想定される。床面中心部よりやや南寄りに位置している。

埋土は4層に分かれ、斜面上方から流れ込んだ状況を示していることから、自然堆積と考えられる。2・4層中から土器、石器や礫などが数多く出土していることから、埋土堆積過程で人為的に廃棄されたものと考えられる。

遺物は第12・13図に掲げた。4～13は弥生中期後葉の甕をまとめている。4～8・11は口縁部が内傾し、体部にハケ調整を施すもの、9・10は口縁部にナデ調整が施された一群である。さらに口縁部に凹線文をもち、頸部に刻み目突帯がめぐる12・13もみられる。14～15は壺の口縁～頸部破片であり、口縁部に凹線文や円形浮文、頸部に突帯がめぐっている。頸部以下はハケ調整である。17は口縁部が大きく張り出し、端部に円形浮文、頸部に凹線が横走する高坏である。同じく18も口縁端部に凹線が1条めぐる高坏の坏部破片である。19は無頸壺であり、口縁部下に焼成前の穿孔がある。

S 5は一部欠損しているが、2面の砥面をもつ板状の砥石である。S 6・7は安山岩の敲石で、亜円礫の上下端部と側面に敲打痕が認められる。

遺構の時期は、出土遺物からIV-1様式、弥生時代中期後葉と考えられる。



第13図 SI11出土遺物(2)

表4 SI11出土土器観察表

遺物No	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No
4	SI11埋土	弥生土器甕	※14.4 △11.0	口縁～体部 1/3	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：黄橙色	良好		2141
5	SI11埋土	弥生土器甕	※16.0 △13.9	口縁～体部 1/3	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1357
6	SI11埋土	弥生土器甕	※12.5 △6.1	口縁～体部 破片	外面：口縁2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ・指オサエ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	良好		1164
7	SI11-P26埋土	弥生土器甕	※14.6 △3.3	口縁～頸部 破片	外面：口縁2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2171
8	SI11埋土	弥生土器甕	※17.3 △6.2	口縁～体部 破片	外面：口縁2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄橙色 内面：黄橙色	良好		2137
9	SI11埋土	弥生土器甕	※18.2 △6.0	口縁～体部 破片	外面：口縁部ナデ、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	良好		1978
10	SI11埋土	弥生土器甕	※16.1 △4.1	口縁～体部 破片	外面：口縁部風化により不明、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄橙色 内面：浅黄橙色	良好		1458
11	SI11埋土	弥生土器甕	※21.8 △8.0	口縁～体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部不明	径1mm以下の白色砂粒・雲母片	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		2092
12	SI11埋土	弥生土器甕	※20.0 △10.5	口縁～体部 1/2	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁部～頸部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1455・1949・1951
13	SI11埋土	弥生土器甕	※18.3 △3.2	口縁～頸部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径2mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		1454
14	SI11埋土	弥生土器壺	※18.5 △10.9	口縁～頸部 1/4	外面：口縁部4条凹線文、頸部ハケ・2条貼付突帯 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1360・1366・1372・1383・2109
15	SS1埋土	弥生土器壺	※17.0 △5.2	口縁～体部 破片	外面：口縁部4条凹線文、頸部2条突帯 内面：口縁～頸部ナデ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		2000
16	SI11埋土	弥生土器壺	※25.2 △7.8	口縁～頸部 1/4	外面：口縁部4条凹線文・円形浮文、頸部ハケ 内面：口縁部刻み・貼付突帯・弧線文、頸部ハケ	径2mm以下の白・黒色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1390・1391・1392・1396・1408
17	SI11埋土	弥生土器高坏	14.2 △13.9	口縁～脚部 1/2	外面：口縁部円形浮文、体部ミガキ、脚部7条凹線文 内面：口縁部ナデ、体部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1361
18	SI11埋土	弥生土器高坏	※16.9 △3.2	口縁～体部 1/6	外面：口縁部2条凹線文、体部ハケ 内面：口縁部ナデ・ミガキ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄色 内面：浅黄褐色	良好		2135
19	SI11埋土	弥生土器無頸壺	※11.0 △5.4	口縁～体部 破片	外面：口縁～体部ナデ、口縁部穿孔 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：にぶい橙色	良好		2134
20	SI11埋土	弥生土器甕	底径7.7 △7.1	体部～底部 1/4	外面：体部ミガキ、底面ナデ 内面：ケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1957・1958

表5 SI11出土土器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・層位名	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上No.
S5	第13図 PL.16	SI11	砥石		12.4	7.6	4.9	6500	2104
S6	第13図 PL.10	SI11	砥石	安山岩	9.0	5.4	5.4	3000	2110
S7	第13図 PL.10	SI11	砥石	安山岩	9.50	6.3	2.4	2100	2095

(3) 段状遺構

SS3 (第14・15図、表6、PL.4・10)

1-B区南寄り、G10・H10グリッドの標高56mの緩斜面に立地する。北側6.5mにはSI 7、南側3mにはSK58が位置する。

床面の平面形は隅丸長方形であり、斜面下方に当たる西壁が認められなかった。

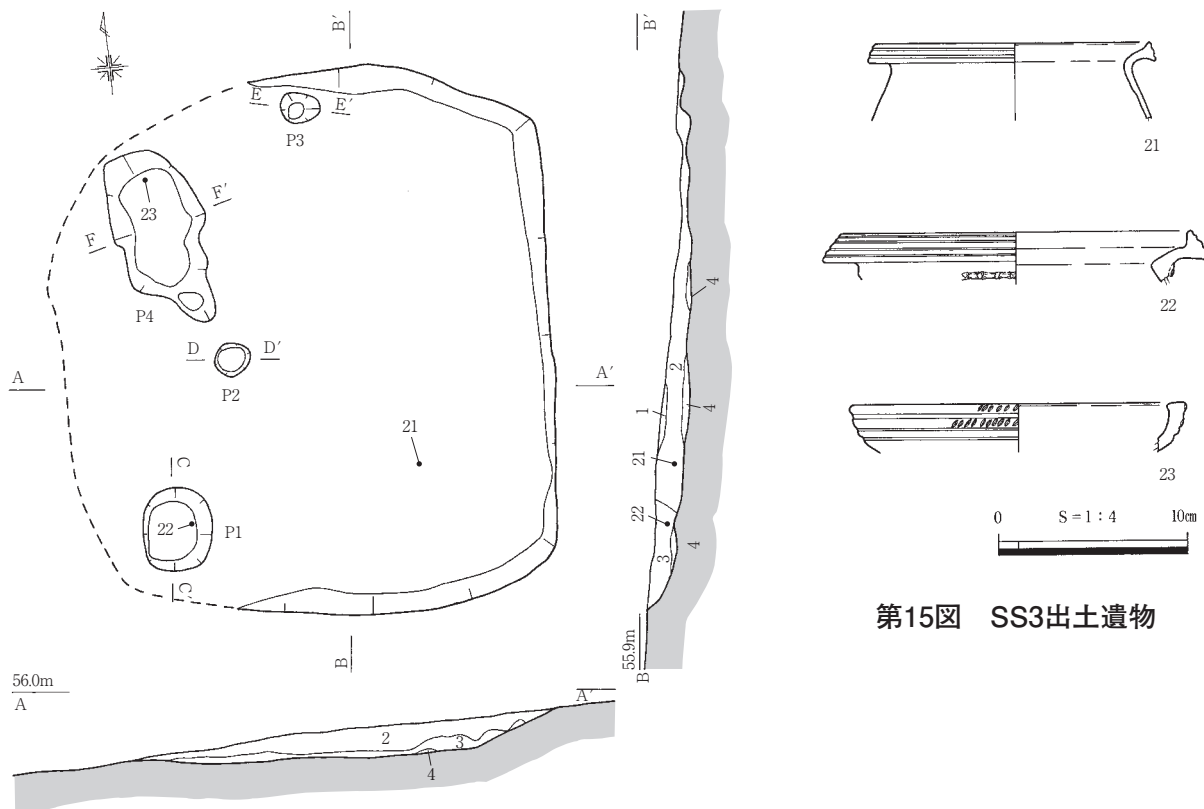
長軸4.35m、短軸3.9m、面積は13.7㎡である。検出面から床面までの深さは、24cm、東壁は30度の角度で外傾して立ち上がる。

柱穴は中心部西寄りにP 2 (28×24-45cm)、北壁際にP 3 (30×24-40cm) が確認された。P 3の埋土では柱痕が確認され、直径は10～15cmとなる。その他、南西隅にP 1 (66×54-18cm)、北西隅にP 4 (150×74-22cm) の不整形のピットが検出された。

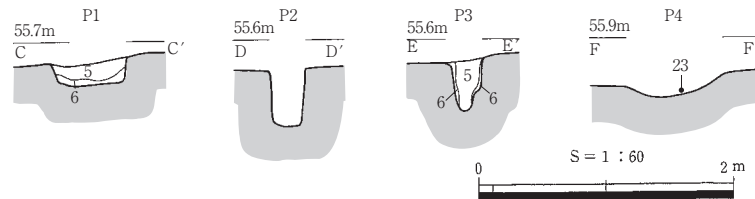
埋土は4層に分かれ、斜面上方の東側から西側に向かって流れ込んでいる状況が確認されることから、自然堆積と考えられる。

遺物は、弥生時代中期後葉の甕21・22、高坏23を掲げている。甕は口縁部に凹線文が施され、22は頸部に刻み目突帯がめぐっている。23は緩やかに内湾する口縁部に3条の凹線が横走し、その間隙に刻みが施されている。

遺構の時期は、出土遺物からIV-1様式、弥生時代中期後葉に位置づけられる。



第15図 SS3出土遺物



第14図 SS3

- 1：暗褐色土：径1mm以下の炭化物を含む。しまり、粘性強い。
- 2：暗褐色土：径1～2cm大の地山ブロック、径1mm以下の炭化物を含む。しまり、粘性強い。
- 3：淡黄褐色土：粘性、しまり強い。
- 4：暗褐色土：径1mm以下の炭化物を含む。粘性、しまり強い。

表6 SS3出土土器観察表

遺物No.	遺層	構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No.
21	SS3	埋土	弥生土器 甕	※14.2 △4.0	口縁～体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部調整不明 内面：風化により調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：にふい黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1883
22	SS3	埋土	弥生土器 甕	※18.4 △2.7	口縁～頸部 破片	外面：口縁部4条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白・黒色砂粒	外面：黄褐色 内面：にふい黄褐色	良好		1907
23	SS3	埋土	弥生土器 高坏	※18.2 △2.5	口縁部 破片	外面：口縁部3条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：オリブ黒色 内面：灰色	良好		1902

(4) 土坑

SK55 (第16図、PL. 5)

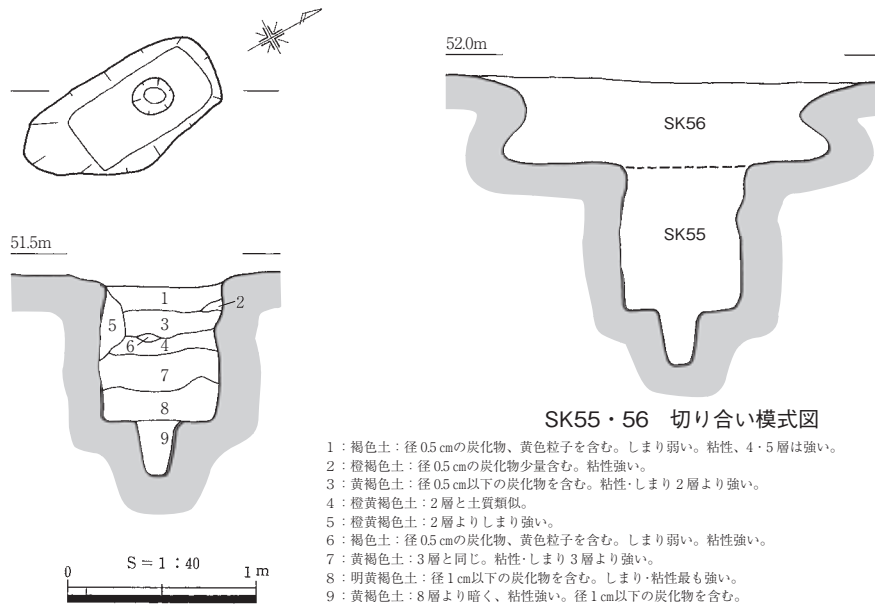
1-B区、G 6グリッドの標高51.9mの緩斜面上に立地する。遺構上半はSK56と重複し、削平されている。

残存部分の平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.1m、短軸0.55m、残存部分の深さは0.7mを測る。埋土は8層に分層でき、地山ブロックを多く含む橙褐色系と炭化物を含む褐色系が互層に堆積している。このなかで、橙褐色土は壁面の崩落土が主な成因と考えられる。

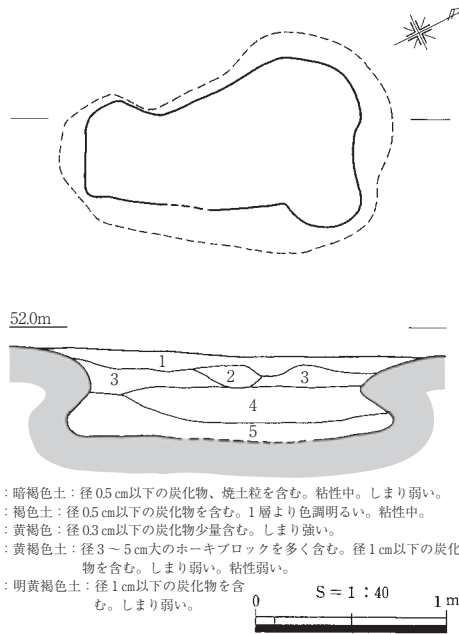
底面中央部に、ピット (20×18-29cm) が検出されていることから、落とし穴と想定される。埋土中からの遺物は確認されなかったため、時期は不明である。

SK56 (第16・18図、表7、PL. 5・10)

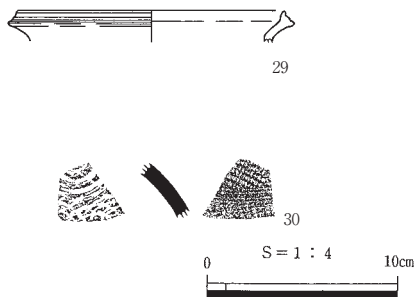
1-B区、G 6グリッドの標高51.9mの緩斜面上に立地する。SK55と重複し、切っている。



第16図 SK55



第17図 SK56



第18図 SK56出土遺物

表7 SK56出土土器観察表

遺物No	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取り上げNo
29	SK56埋土	弥生土器 甕	※14.2 △1.6	口縁～頸部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		357
30	SK56埋土	須恵器 甕	- △2.9	体部 破片	外面：平行タタキ・カキメ 内面：青海波文	密	外面：橙～明赤褐色 内面：明赤褐色	堅緻	自然軸	696

平面形は長軸1.45m、短軸7.7mの不整楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは45cmで、本来の掘り込み面は、さらに高かったものと想定される。掘り方は、下半部は広がる袋状となっており貯蔵穴と考えられる。

埋土は5層に分かれ、最上層の1層暗褐色土以外は、地山ブロックや炭化物を含む黄褐色土系が占めている。

遺物は、須恵器甕30と弥生時代中期後葉の甕29を掲げている。須恵器甕は混入品と考えられる。また、未掲載であるが黒曜石製の剥片や碎片などが多数出土した。

遺構の時期は、出土遺物からIV-1様式、弥生時代中期後葉と考えられる。

SK57 (第19図、PL. 5)

1-C区、C 4グリッドの標高47.5～48.2mの斜面上に立地する。

平面形は長軸2.7m、短軸1.62mの不整楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは40cmで、底面形は瓢状に歪である。掘り方は、やや尾根方向が緩やかな壁となり、底面はやや丸味を帯びている。

埋土は4層に分かれ、最上層の黒色土以外は地山の色調と類似した褐色系であり、微細な炭化物を含んでいた。遺物は、埋土中から弥生時代中期後葉の土器小片が出土しているが、掲載していない。

遺構の時期は、出土遺物がIV-1・2様式で、褐色系の埋土であることから弥生時代中期後葉と想定される。

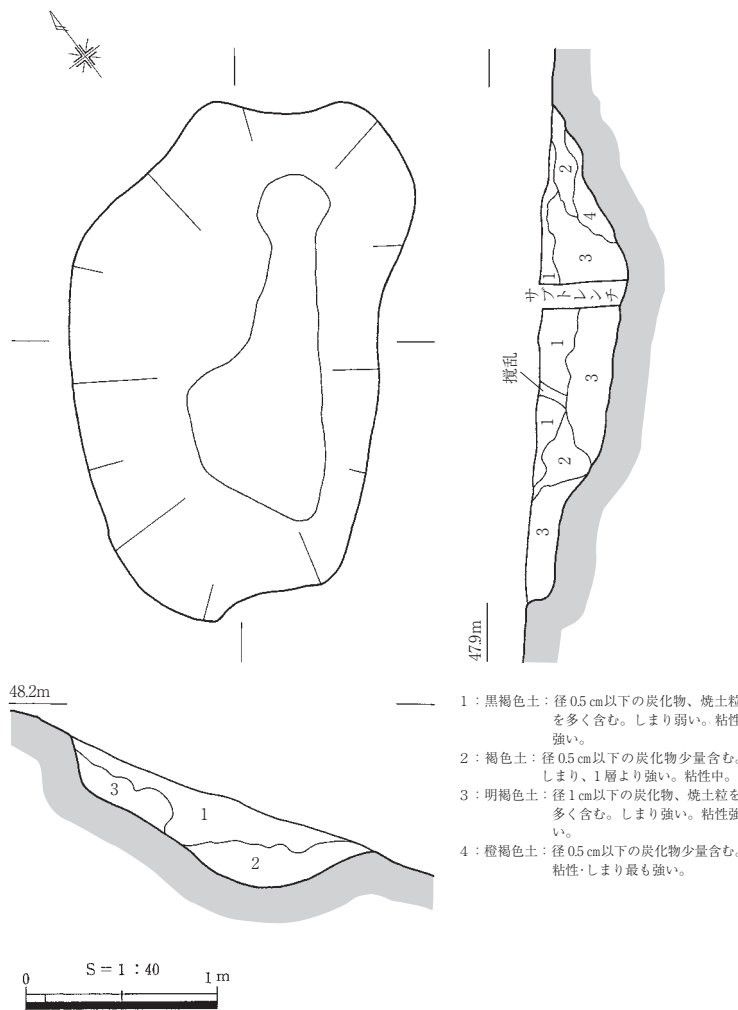
SK58 (第20図、PL. 5・6)

1-B区、H10グリッドの標高48mの緩斜面上に立地する。北側3mには、SS3が位置している。

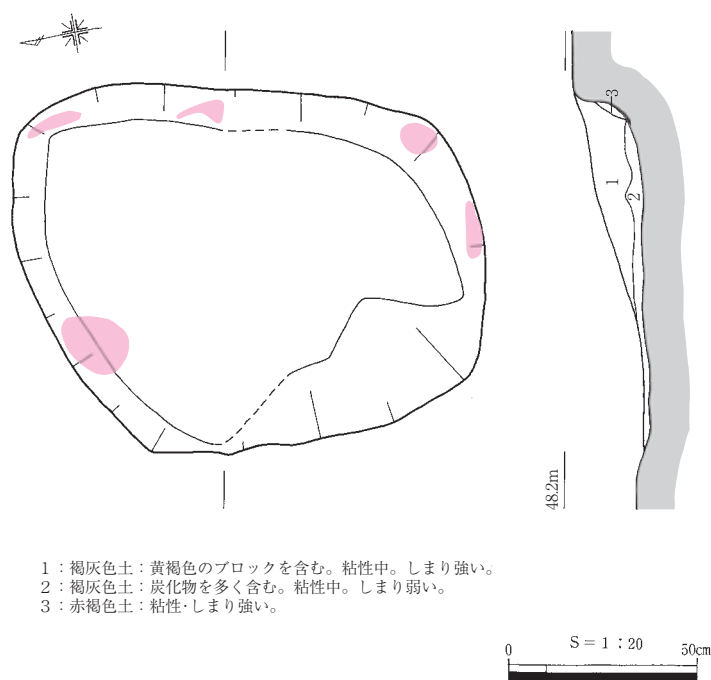
平面形は、長軸1m、短軸1.21m、北東角がやや張り出した不整隅丸方形を呈している。検出面から底面までの深さは17cmで、谷側は削平されてしまっている。底面の形状は、歪な台形状であり底面は平坦となっている。

埋土は3層に分かれ、底面を覆う2層で多量の炭化物が出土している。また、南北壁と東壁は硬く焼きしまった赤褐色の被熱面が部分的に認められた。したがって、簡易な「伏せ焼き」法を用いて炭を焼いた「製炭土坑」であると考えられる。

遺構の時期は、遺物が出土しておらず不明である。



第19図 SK57



第20図 SK58

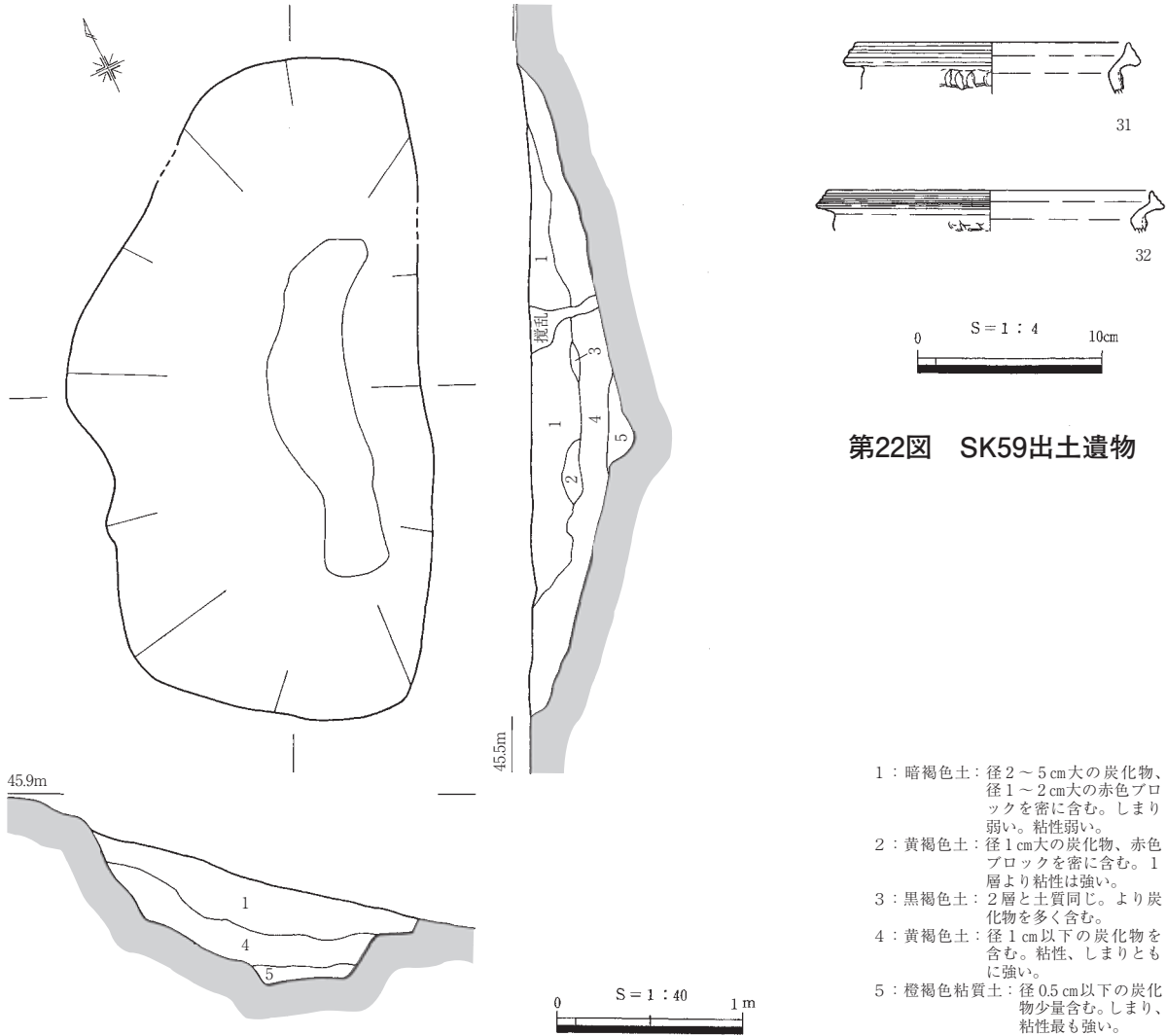
SK59 (第21・22図、表8、PL. 6・10)

1-C区、A 3グリッドの標高45.2～45.9mの斜面上に立地する。

平面形は長軸3.55m、短軸1.93mの不整長方形を呈している。検出面から底面までの深さは47cmで、底面は不整長方形である。端軸方向の掘り方は、やや尾根方向が緩やかな壁となり、長軸方向は両端から中心に向かって緩やかに下がっている。

埋土は5層に分かれ、1・3層が暗褐色系で、それ以外は地山の色調と類似した褐色系である。1層は微細な炭化物を多く含み、多くの遺物が出土している。

遺物は、弥生時代中期後葉の甕31・32を掲げている。いずれも口縁部に凹線文をもち、頸部に刻み目突帯がめ



第21図 SK59

表8 SK59出土土器観察表

遺物No.	遺層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No.
31	SK59埋土	弥生土器甕	※14.8 △2.8	口縁～頸部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁～頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1498
32	SK59埋土	弥生土器壺	※17.8 △2.2	口縁～頸部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁部ナデ、頸部ナデ	径1mm以下の砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1493

ぐっている。

遺構の時期は、出土遺物がIV-1様式、弥生時代中期後葉と考えられる。

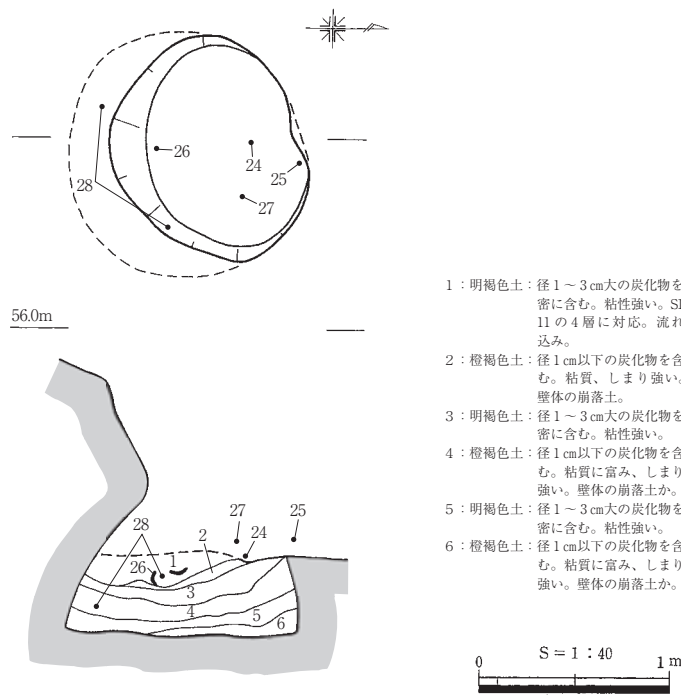
SK60（第23・24図、表9、PL. 3・6・9・10）

1-C区、A 6グリッド、標高49.5mの斜面上に立地する。SI11南壁中央部を抉るように掘り込んでいる。

検出面での平面形は長軸1.15m、短軸1mの不整円形を呈している。断面は袋状を呈し、検出面からの深さは最大で1.34mである。底面は長軸1.3m、短軸1.25mの不整円形である。

埋土は6層に分かれ、明褐色土と橙褐色土が互層となり、前者には炭化物が多く混じる。最上層の1層はSI11の4層に対応することから、竪穴住居に伴うものと考えられる。

遺物は、弥生時代中期後葉の甕・壺を5点掲げている。甕24は口縁部に2条の凹線がめぐり、タテ

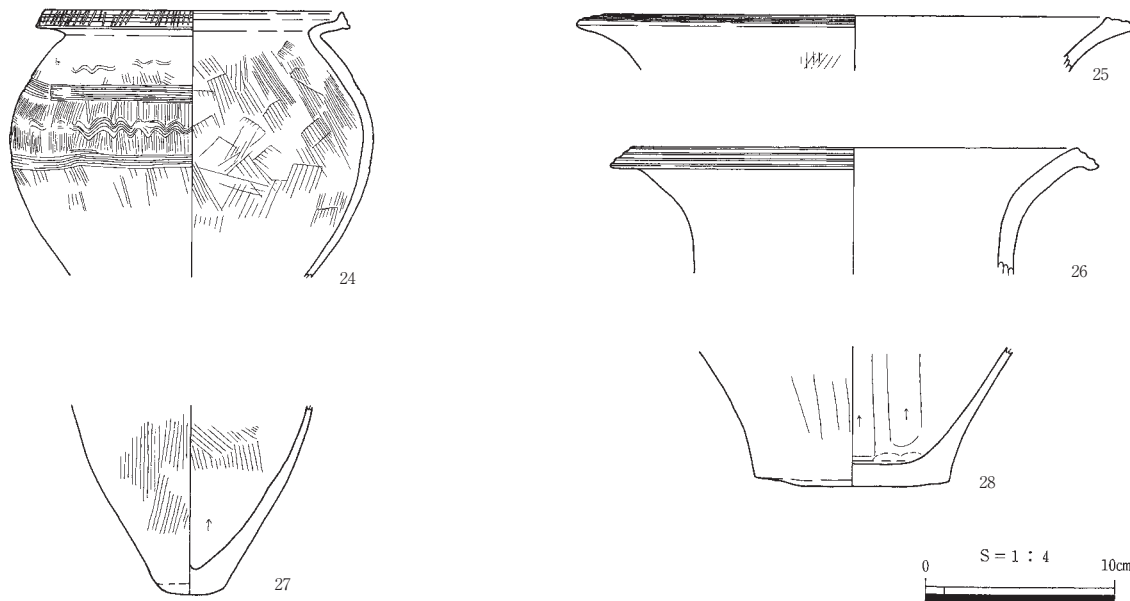


- 1：明褐色土：径1～3cm大の炭化物を密に含む。粘性強い。SI 11の4層に対応。流れ込み。
- 2：橙褐色土：径1cm以下の炭化物を含む。粘質、しまり強い。壁体の崩落土。
- 3：明褐色土：径1～3cm大の炭化物を密に含む。粘性強い。
- 4：橙褐色土：径1cm以下の炭化物を含む。粘質に富み、しまり強い。壁体の崩落土。
- 5：明褐色土：径1～3cm大の炭化物を密に含む。粘性強い。
- 6：橙褐色土：径1cm以下の炭化物を含む。粘質に富み、しまり強い。壁体の崩落土。

方向に刻みが施されている。体部はハケ調整後に、櫛描文が描かれる。25・26は外傾する口縁部に3条の凹線がめぐる壺である。27は砲弾形の甕底部破片であり、内外面ハケ調整である。28は外面ミガキ、内面はケズリ調整が施された底部破片である。

遺構の時期は、出土遺物がIV-1様式、弥生時代中期後葉と考えられる。

第23図 SK60



第24図 SK60出土遺物

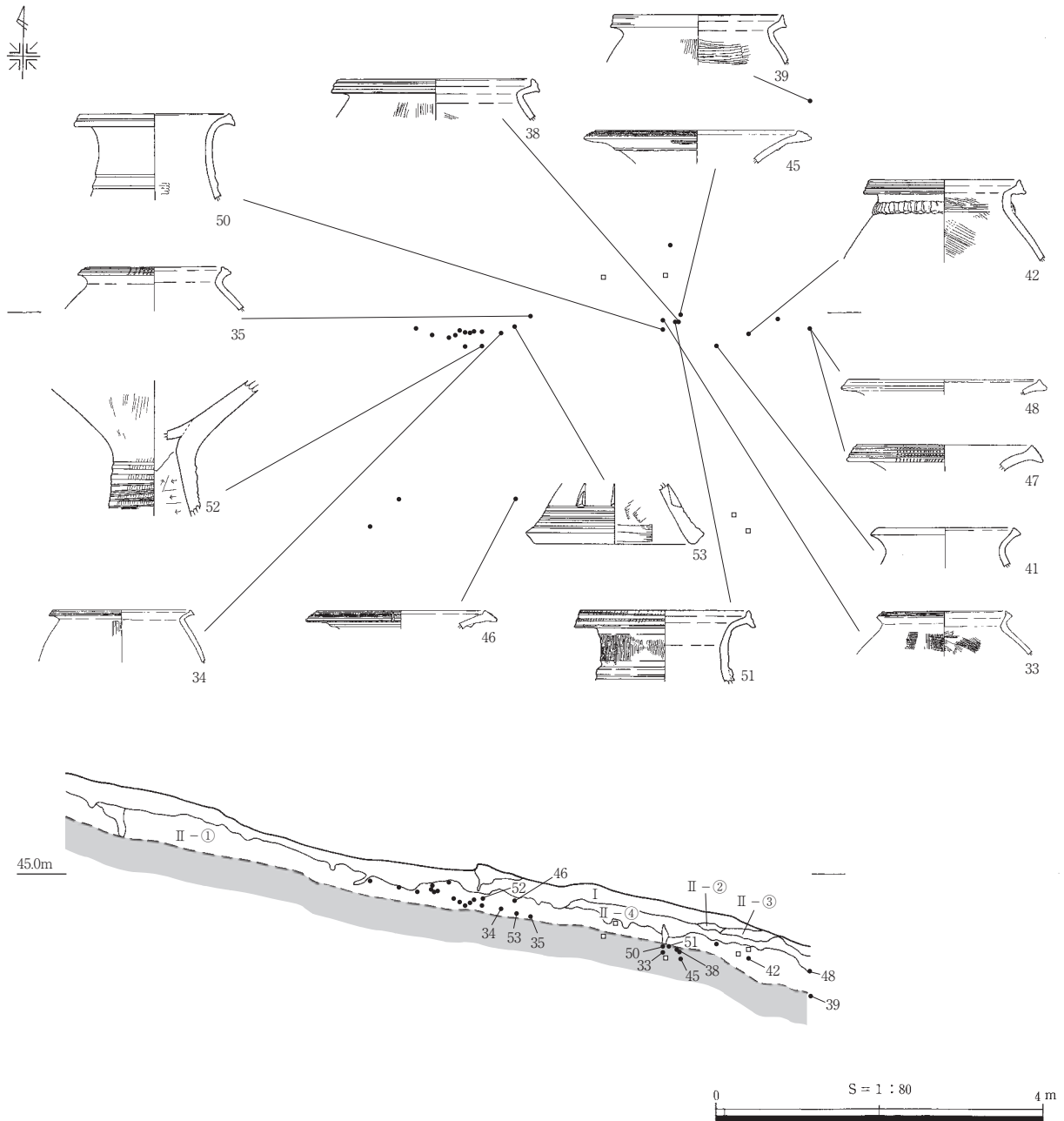
表9 SK60出土土器観察表

遺物No	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No
24	SK60埋土	弥生土器 甕	※15.8 △14.0	口縁～体部 2/3	外面：口縁部2条凹線文、体部ハケ→櫛描波状文 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒・ 雲母片	外面：橙色 内面：橙色	良好	体部スス付着	2170
25	SK60埋土	弥生土器 壺	※26.8 △2.9	口縁～頭部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頭部ナデ 内面：口縁～頭部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2173
26	SK60埋土	弥生土器 壺	※23.8 △6.6	口縁～頭部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頭部ナデ 内面：口縁部ナデ、頭部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：黄橙色	良好		2216
27	SK60埋土	弥生土器 甕	2.9 (底) △10.0	体～底部 1/3	外面：ハケ・ナデ 内面：ケズリ・ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2159
28	SK60埋土	弥生土器 壺	10.4 (底) △7.4	体～底部 1/5	外面：体部ミガキ、底面ナデ 内面：体部ヘラケズリ・ナデ	径2mm以下の白・黒色砂粒	外面：橙色 内面：黄橙色	良好		2195・2210

(5) 土器溜り

土器溜り4 (第25～27図、表10・11、PL. 7・10～12・17)

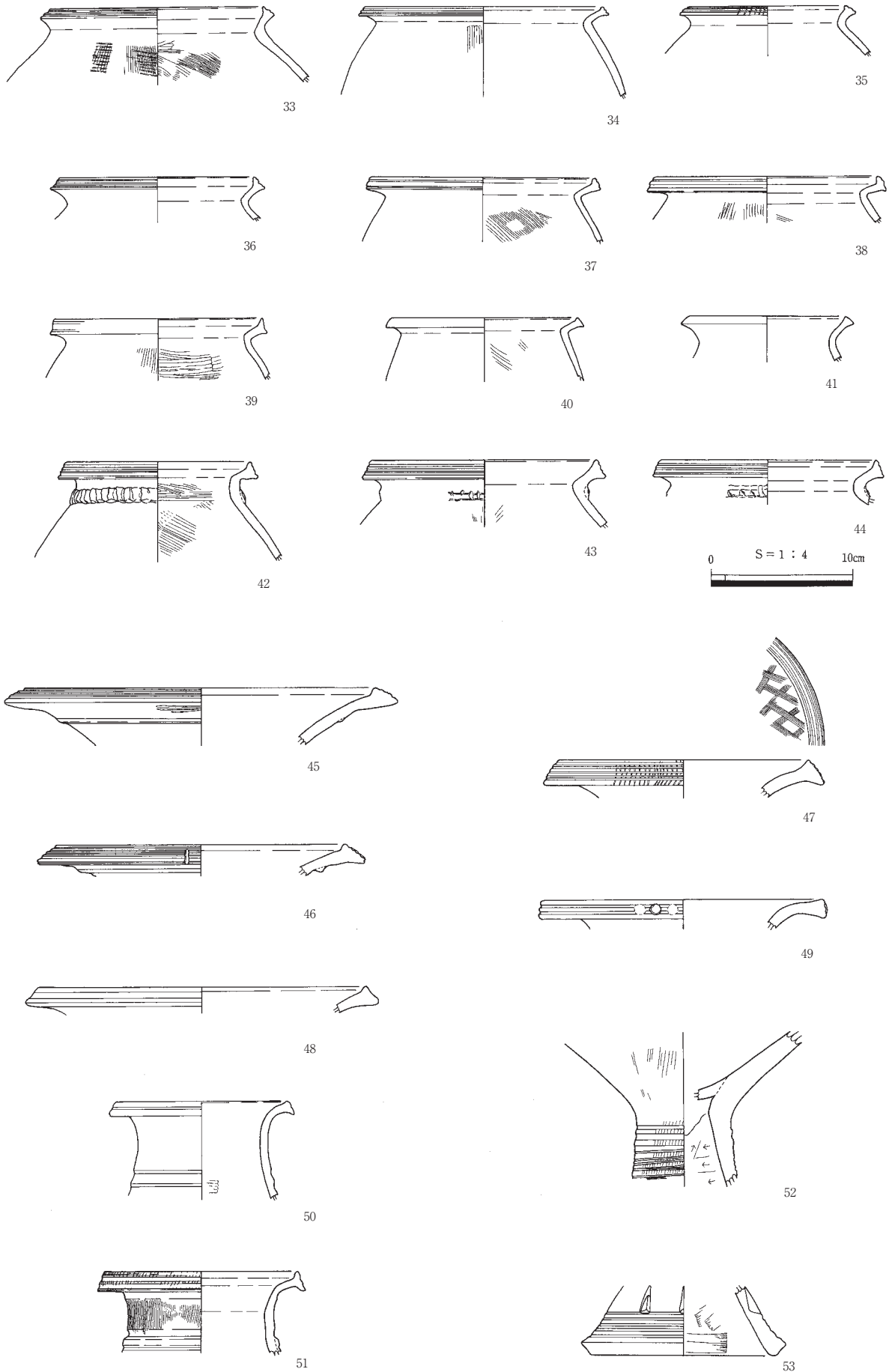
1-C区、B5グリッドの標高43.5～45mの谷筋に位置する。遺物の分布は径7mの範囲にまとまり、



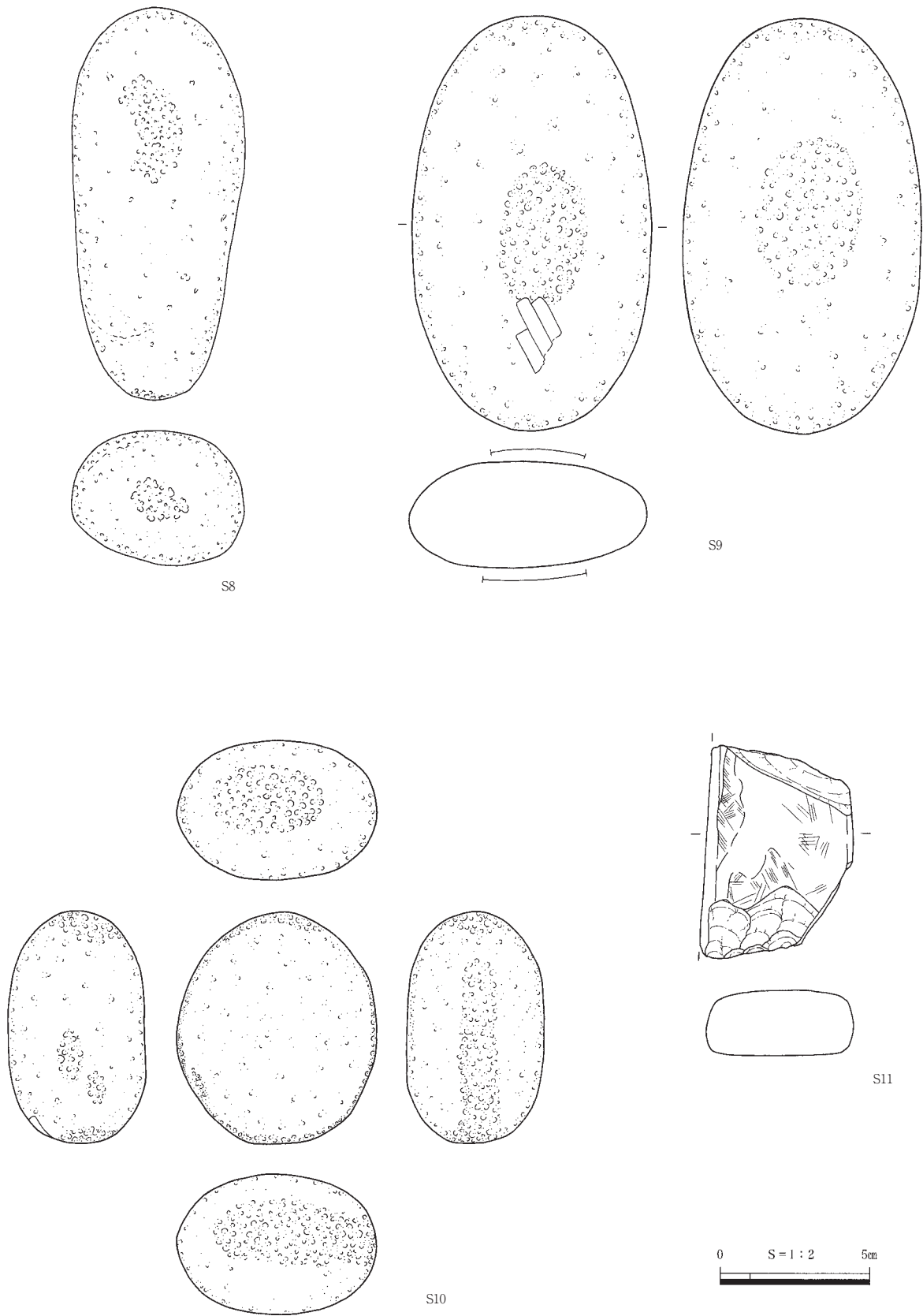
第25図 土器溜り4

比高差1.5m、基本層序Ⅱ-①～④層に含まれる。①～④層は暗褐～黒褐色の炭化物や焼土粒を多く含む層であることから、遺構埋土の可能性を想定しサブトレンチを設定して掘り下げを試みたが、床面や壁などは検出されなかった。上記の①～④層は1-C区ではこの範囲のみ堆積し、遺物がまとまって出土していることから、人為的な廃棄地点の可能性が高い。また、本層の下部である⑤層中からも多くの遺物が検出されており、南北の尾根に挟まれた谷筋の中心部であることから、遺物が溜りやすい地形的条件があったと考えられる。

第26・27図では、土器溜り4の遺物を掲げている。33～44は甕であり、口縁部に凹線文がめぐる一群33～39と頸部に刻み目突帯を有する42～44、口縁部がナデ調整の40・41の3群に分かれる。45～51は壺で、口縁端部に凹線を持つことでいずれも共通しているが、47は内面に斜格子状の櫛描文が描かれ、49は口縁部に円形浮文が貼り付けられるなど特徴が若干異なる。52・53は高坏脚部であり、



第26図 土器溜り4出土遺物(1)



第27図 土器溜り4出土遺物(2)

表10 土器溜り4出土土器観察表

遺物No.	遺構・層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No.
33	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 甕	※15.2 △5.3	口縁-体部 1/4	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部-頸部ミガキ・ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好	体部スス付着	1723
34	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 甕	※16.8 △6.2	口縁-体部 1/6	外面：口縁部2条凹線文、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1645
35	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 甕	※10.8 △3.5	口縁-体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部不明 内面：口縁部ナデ、体部不明	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1685
36	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 甕	※13.6 △3.1	口縁-頸部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁-体部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：浅黄褐色	良好		1985
37	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 甕	※15.6 △4.5	口縁-体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	良好		1655
38	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 甕	※15.8 △3.3	口縁-体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰白色 内面：浅黄褐色	良好		1729
39	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 甕	※14.8 △4.2	口縁-体部 1/6	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：浅黄褐色	良好		1350
40	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 甕	※13.0 △4.4	口縁-体部 破片	外面：口縁部ナデ、体部体部風化により調整不明 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm大の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1772
41	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 壺	※10.8 △3.2	口縁-頸部 破片	外面：風化により調整不明 内面：ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1800
42	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 甕	※13.0 △7.0	口縁-体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯、体部調整不明 内面：口縁部ナデ、頸部-体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黒褐色	良好		1803
43	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 甕	※14.0 △4.8	口縁-体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1478
44	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 甕	※15.2 △3.1	口縁-頸部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		2014
45	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 壺	※24.6 △4.0	口縁-頸部 破片	外面：口縁部4条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁-頸部ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1921
46	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 壺	※20.2 △2.1	口縁部 破片	外面：口縁部5条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁-頸部ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1618
47	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 壺	※17.6 △2.6	口縁部 破片	外面：口縁部5条凹線文 内面：ナデ→斜格子状溝挿文	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1769
48	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 壺	※23.0 △1.8	口縁部 破片	外面：口縁部2条凹線文 内面：口縁部ナデ	径0.5mm大の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1769
49	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 壺	※19.4 △2.0	口縁部 破片	外面：口縁部2条凹線文・円形浮文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	外面赤色塗彩	1913
50	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 壺	※12.2 △6.8	口縁-頸部 破片	外面：口縁部1条凹線文、頸部2条凹線文 内面：口縁部ナデ、頸部-体部ハケ→ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		1821
51	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 壺	※13.8 △5.7	口縁-頸部 1/2	外面：口縁部3条凹線文、頸部ハケ・貼付突帯 内面：口縁-頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1728
52	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 高坏	- △10.9	体-脚部 1/6	外面：体部ハケ、脚部9条凹線文 内面：体部ナデ、脚部ケズリ	径1mm大の白色砂粒	外面：黄灰色 内面：浅黄褐色	良好		1314
53	土器溜り4 黄褐色土	弥生土器 高坏	底径※15.0 4.9	脚部 破片	外面：三角形透孔、5条凹線文 内面：ケズリ	径1.5mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1643

表11 土器溜り4出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上No.
S8	第27図 PL.10	谷部土器溜り	敲石	安山岩	13.1	5.80	4.5	500.0	1794
S9	第27図 PL.10	谷部土器溜り	敲石	安山岩	13.90	8.0	3.4	630.0	1341
S10	第27図 PL.10	谷部土器溜り	敲石	安山岩	7.8	6.7	4.7	340.0	1713
S11	第27図 PL.17	谷部土器溜り	扁平片刃石斧		7.2	2.3	5.0	140.0	1804

いずれも凹線が横走し、後者は三角状透孔が確認される。以上の土器は、IV-1・2様式、弥生時代中期後葉に比定されよう。

S8～10は、垂円礫の敲石であり、敲打痕が側部全面に見られるS10、上下面のS9、上面と先端部のS8が確認される。石材はいずれも安山岩である。S11は扁平片刃石斧の破片である。

(6)ピット

P133 (第28図、表12、PL.7・11)

1-C区、A3グリッドの標高44.7mの斜面上に立地する。北西方向3.5mには、SK59が位置する。A3グリッドはII-①層は流出してしまっているため、II-⑤層検出段階で土師器甕54が検出された。したがって、ピット上面は不明であり下半部のみ確認されている。

残存部分の平面形は長軸18cm、短軸17cmの不整形円形である。掘り方は、土師器の器形に合わせており、隙間はほとんど見られなかった。土師器内部には、径5mm以下の炭化物を含む暗褐色土が充填していたが、これはII-①層に近似する。

54は土師器甕である。口縁が外反し端部が先細りし、球胴形の体部を持つ。口縁部は内外面ナデ、体部外面はハケ、内面はヘラケズリ調整が施される。以上の特徴から、7世紀前半頃に比定されよう。

P134（第29図、表12、PL.11）

1-C区、Z 3グリッドの標高39.7mに立地する。

平面形は長軸41cm、短軸35cmの不整円形を呈している。検出面からの深さは21cm、断面形は碗状を呈している。重機による表土剥ぎ中に須恵器55が検出し、その後の調査によってピット埋土中に包含されていることが判明した。

埋土は微細な炭化物や焼土粒を含む暗褐色土であり、基本層序Ⅱ-①層に近似する。したがって、本来斜面上に堆積していた本層は流出してしまった可能性が高い。

周囲には、径10～30cm大の礫がピット壁面に沿って認められた。須恵器内部は、しまりの弱い暗褐色土が混入していたが、骨片などは確認されなかった。

55は口縁部が外反し、肩部がくの字状に張る高台付壺である。口縁部がやや歪に湾曲しており、底面に高台を持つ。8世紀代に位置づけられよう。

P135（第30図）

1-B区、G 8グリッドの標高55.1mに立地する。北東側2.5mにSI 7が位置する。平面形は長軸80.2cm、短軸55cmの不整楕円形である。断面形は皿状で、検出面から底面までの深さは10cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P136（第30図）

1-C区北端、B 2グリッドの標高49.5mの斜面部に立地する。平面形は長軸50cm、短軸33cmの不整楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは28cm、掘り方は段状である。埋土は2層に分かれ、いずれも微細な炭化物を含む。遺物が出土しておらず、時期は不明。

P137（第30図）

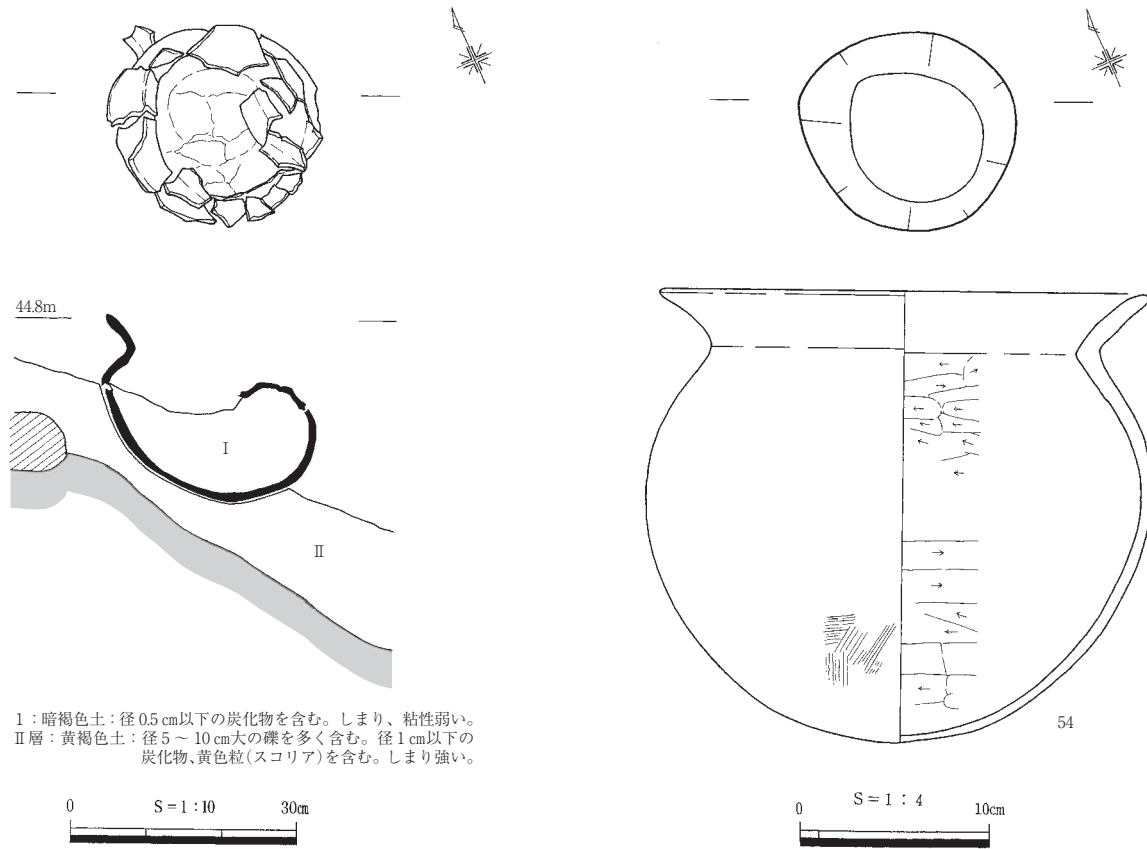
1-C区北端、B 2グリッドの標高49.2mの斜面部に立地する。北西側2.8mにはP136が位置している。平面形は長軸80cm、短軸68cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは40cmを測る。埋土は、径1cm以下の炭化物を含む暗褐色土のみ堆積している。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P138（第30図）

1-C区北端、B 1グリッドの標高49.5mの斜面部に立地する。南東側1mにP135が位置する。平面形は長軸72cm、短軸37cmの不整楕円形を呈している。断面形は段状で、検出面から底面までの深さは30cmを測る。埋土はP137と同じである。遺物は出土しておらず、時期は不明。

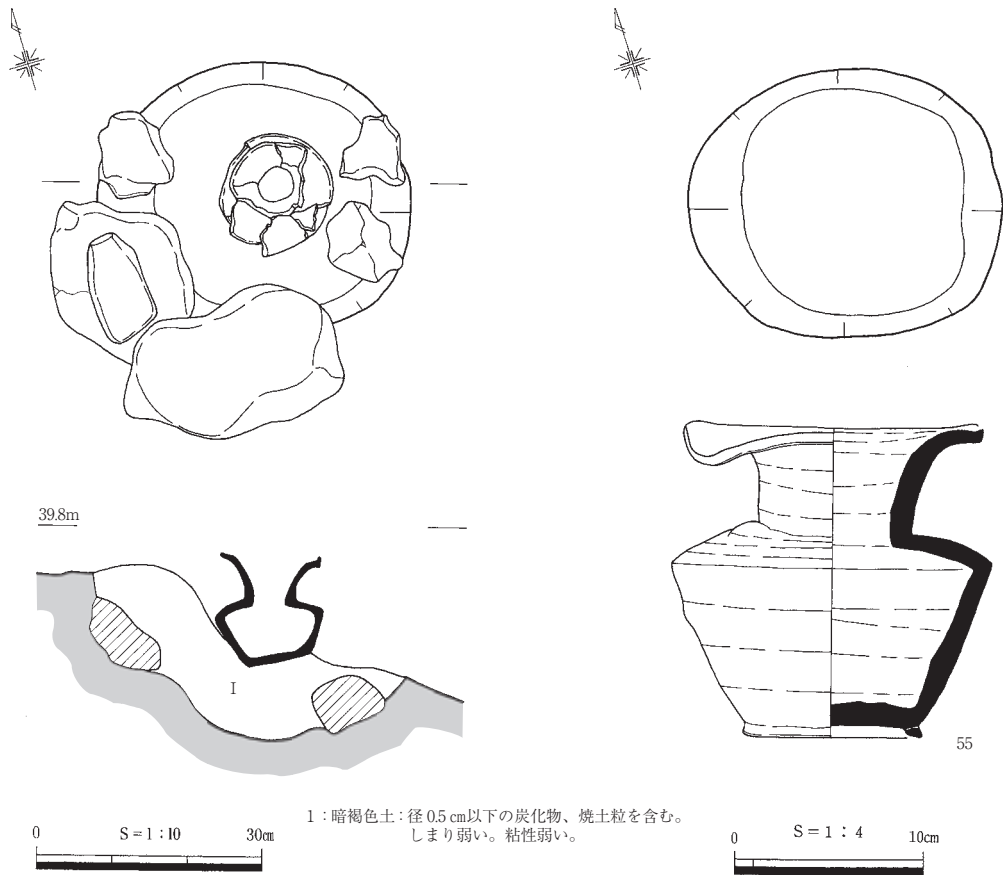
P139（第30図）

1-C区北端、B 2グリッドの標高49.1mの斜面部に立地する。北西側1.2mにP137が位置する。平面形は長軸50cm、短軸40cmの不整楕円形を呈している。断面形は播り鉢状で、検出面から底面までの深さは18cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明。



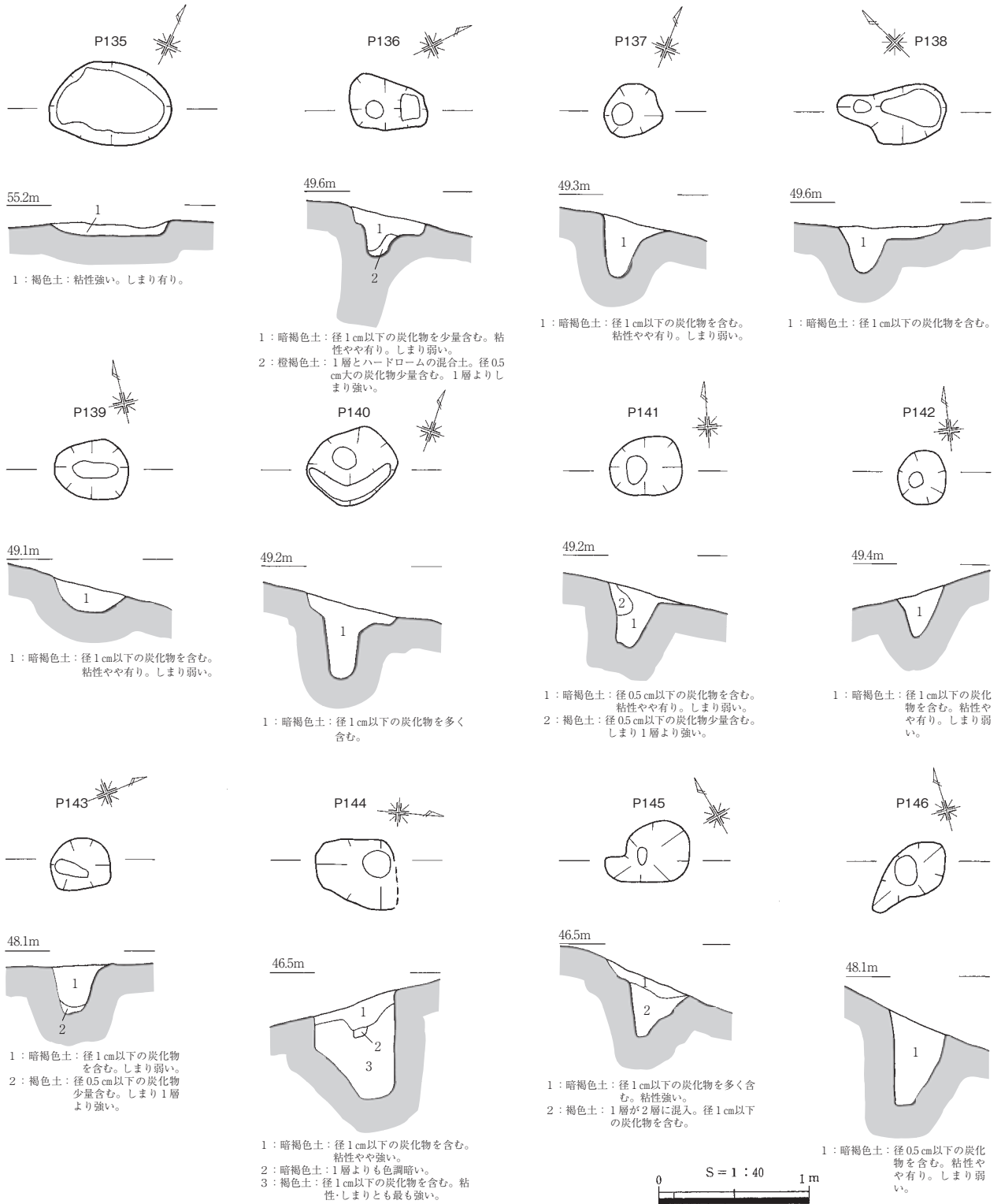
Ⅰ：暗褐色土：径0.5cm以下の炭化物を含む。しまり、粘性弱い。
 Ⅱ層：黄褐色土：径5～10cm大の礫を多く含む。径1cm以下の炭化物、黄色粒(スコリア)を含む。しまり強い。

第28図 P133及び出土遺物



Ⅰ：暗褐色土：径0.5cm以下の炭化物、焼土粒を含む。
 しまり弱い。粘性弱い。

第29図 P134及び出土遺物



第30図 ピット(1)

P140 (第30図)

1-C区北端、B 2グリッドの標高49.1mの斜面部に立地する。南西側40cmにはP137が位置している。平面形は長軸60cm、短軸53cmの不整円形である。断面形は段状で、検出面から底面までの深さは52cmを測る。埋土は、径1cm以下の炭化物を多く含む暗褐色土のみ堆積している。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P141 (第30図)

1-C区北端、B 2グリッドの標高48.9mの斜面部に立地する。北西側2.5mにはP140が位置している。平面形は長軸48cm、短軸40cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは40cmを測る。埋土は2層に分かれ、いずれも微細な炭化物が混じる。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P142 (第30図)

1-C区北、B 3グリッドの標高49.4mの斜面部に立地する。南東側4mにはS K59が位置している。平面形は長軸35cm、短軸32cmの不整円形である。断面形はV字状で、検出面から底面までの深さは28cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P143 (第30図)

1-C区、B 3グリッドの標高48mの斜面部に立地する。東側2.5mにはS K59が位置している。平面形は長軸40cm、短軸33cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは34cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P144 (第30図)

1-C区、B 3グリッドの標高46.4mの斜面部に立地する。平面形は長軸53cm、短軸45cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは70cmを測る。埋土は3層に分かれ、微細な炭化物が混じる。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P145 (第30図)

1-C区、B 3グリッドの標高47.4mの斜面部に立地する。北西1.8mにはP144が位置している。平面形は長軸56cm、短軸40cmの不整円形である。断面形はV字状で、検出面から底面までの深さは43cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P146 (第30図)

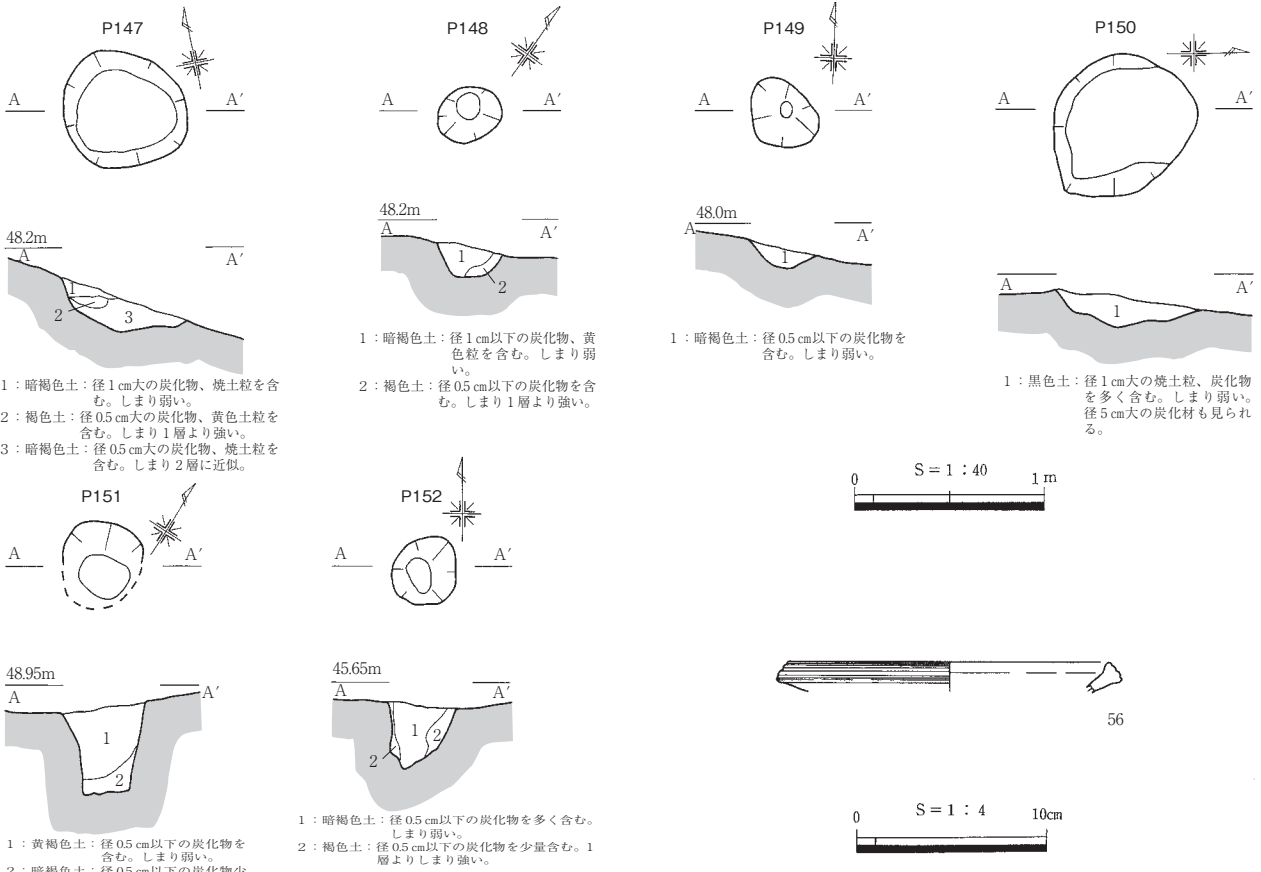
1-C区、C 4グリッドの標高48.1mの斜面部に立地する。平面形は長軸63cm、短軸34cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは62cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P147 (第31図)

1-C区、C 5グリッドの標高48.1mの斜面部に立地する。平面形は長軸65cm、短軸62cmの不整円形である。断面形は播り鉢状で、検出面から底面までの深さは17cmを測る。埋土は3層に分かれ、いずれも微細な炭化物が混じる。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P148 (第31図)

1-C区、C 5グリッドの標高48.1mの斜面部に立地する。北東2.4mにP147が位置する。平面形は



第31図 ピット(2)及びP150出土遺物

表12 P133・134・150出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No.
54	P133 II層	土師器 甕	※25.0 23.7	口縁~底部 完形	外面：口縁部ナデ、体部ハケ→ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ・ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1559
55	P134 II層	須恵器 台付壺	※15.9 △16.6	口縁~底部 2/3	外面：口縁~底部回転ナデ 内面：口縁~底部回転ナデ	密	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		1607・1608
56	P150 埋土	弥生土器 甕	※17.0 △16	口縁部 破片	外面：口縁部3条凹線文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄橙色 内面：黄橙色	良好		288

長軸35cm、短軸28cmの不整円形である。断面形は椀状で、検出面から底面までの深さは17cmを測る。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P149 (第31図)

1-C区、C 5グリッドの標高48mの斜面部に立地する。北東1.6mにP148が位置する。平面形は長軸33cm、短軸29cmの不整円形である。断面形は掘り鉢状で、検出面から底面までの深さは10cmを測る。埋土は、微細な炭化物が混じる。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

P150 (第31図、表12、PL.12)

1-B区北端、G 8グリッドの標高53.9mの緩斜面に立地する。南側3mにSI 7が位置する。平面形は長軸76cm、短軸72cmの不整円形で、北側に向かってコの字状に開く。断面形は掘り鉢状で、検出面から底面までの深さは17cmを測る。埋土は、炭化物が多く混じり、口縁部に凹線文を持つ甕56が出土している。遺構の時期は、IV-1・2様式、弥生時代中期後葉と想定される。

P151 (第31図)

1-C区、C 6グリッドの標高48.8mの谷部上方に立地する。平面形は長軸45cm、短軸42cmの不整円

形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは45cmを測る。埋土は2層に分かれ、微細な炭化物が混じる。図示していないが、埋土中から弥生時代中期後葉土器片が出土している。遺構の時期も、弥生時代中期後葉と考えられる。

P152 (第31図)

1-C区、B4グリッドの標高45.5mの斜面上に立地する。平面形は長軸35cm、短軸33cmの不整円形である。断面形は筒状で、検出面から底面までの深さは34cmを測る。埋土は2層に分かれ、柱痕も確認された。遺物が出土しておらず、時期は不明である。

(7) 遺構外出土遺物

本節では遺構外出土遺物を掲載する。平成18年度調査で回収された遺物はコンテナ数約40箱であり、その主体は1-C区谷部の包含層から得られている。遺物を瞥見すると、縄文土器晩期から古代律令期まで及ぶが、主体はやはり弥生時代中期後葉である。

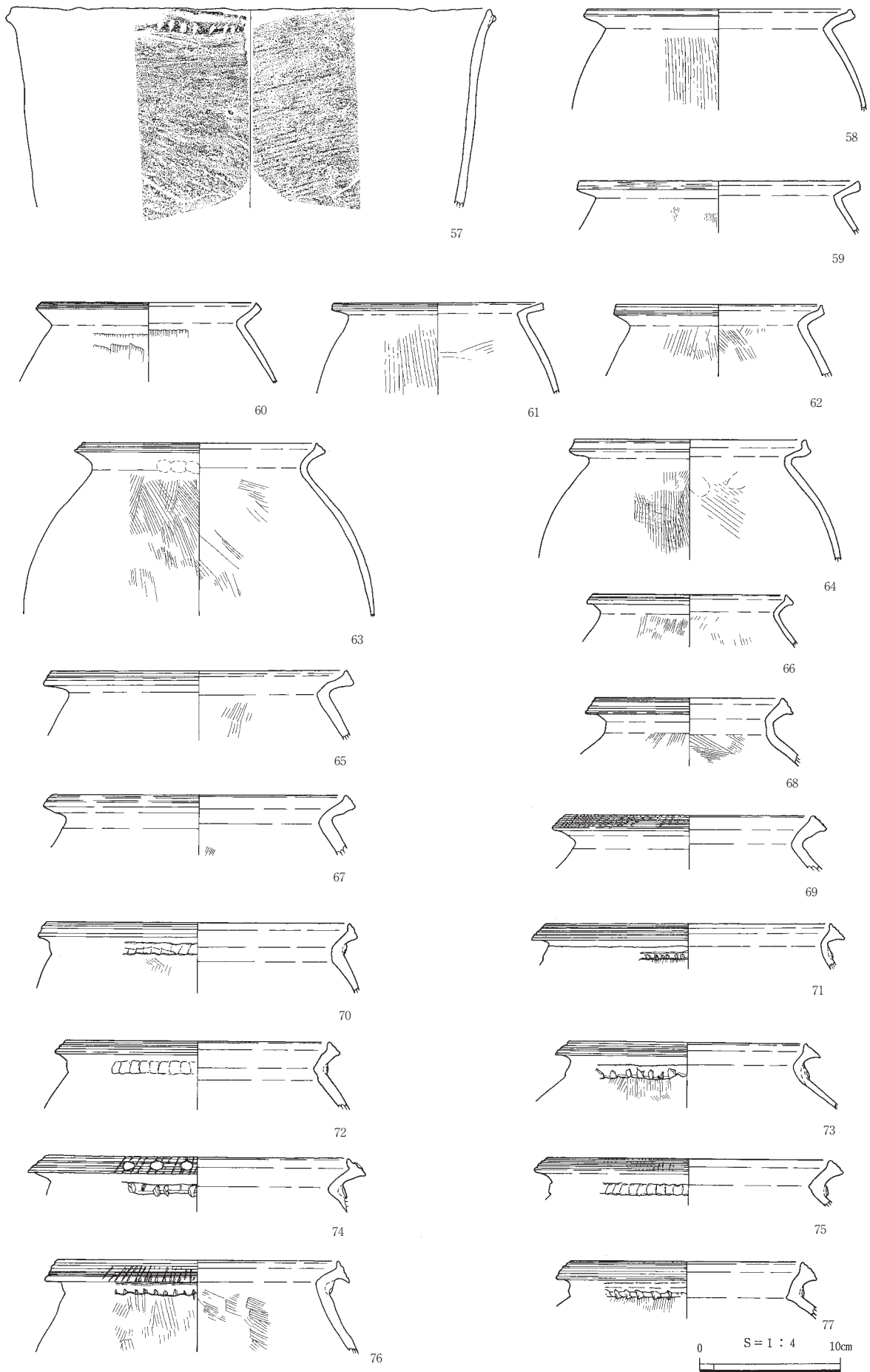
57は縄文時代晩期突帯土器である。口縁端部よりやや下がった位置に、断面が丸味を帯びる粘土紐を貼り付けて、刻みを施している。内外面ナデ調整である。

58～94までは弥生時代中期後葉土器をまとめている。58～69は口縁部に凹線文がめぐり、頸部がナデ、体部にハケ調整を施している甕である。口縁帯が短い58～62と、やや拡張する63～69があり、68・69はその特徴が顕著である。これに対して、頸部に刻みの入った突帯がめぐる甕70～77を掲げている。全体的に、口縁帯がやや拡張しており、頸部の刻みには、74・76・77のように一定の間隔を空けて施すものと、70・75に見られるような連続的な押し引きによるものが認められる。調整は口縁部から頸部はナデ、体部はハケが一般的である。

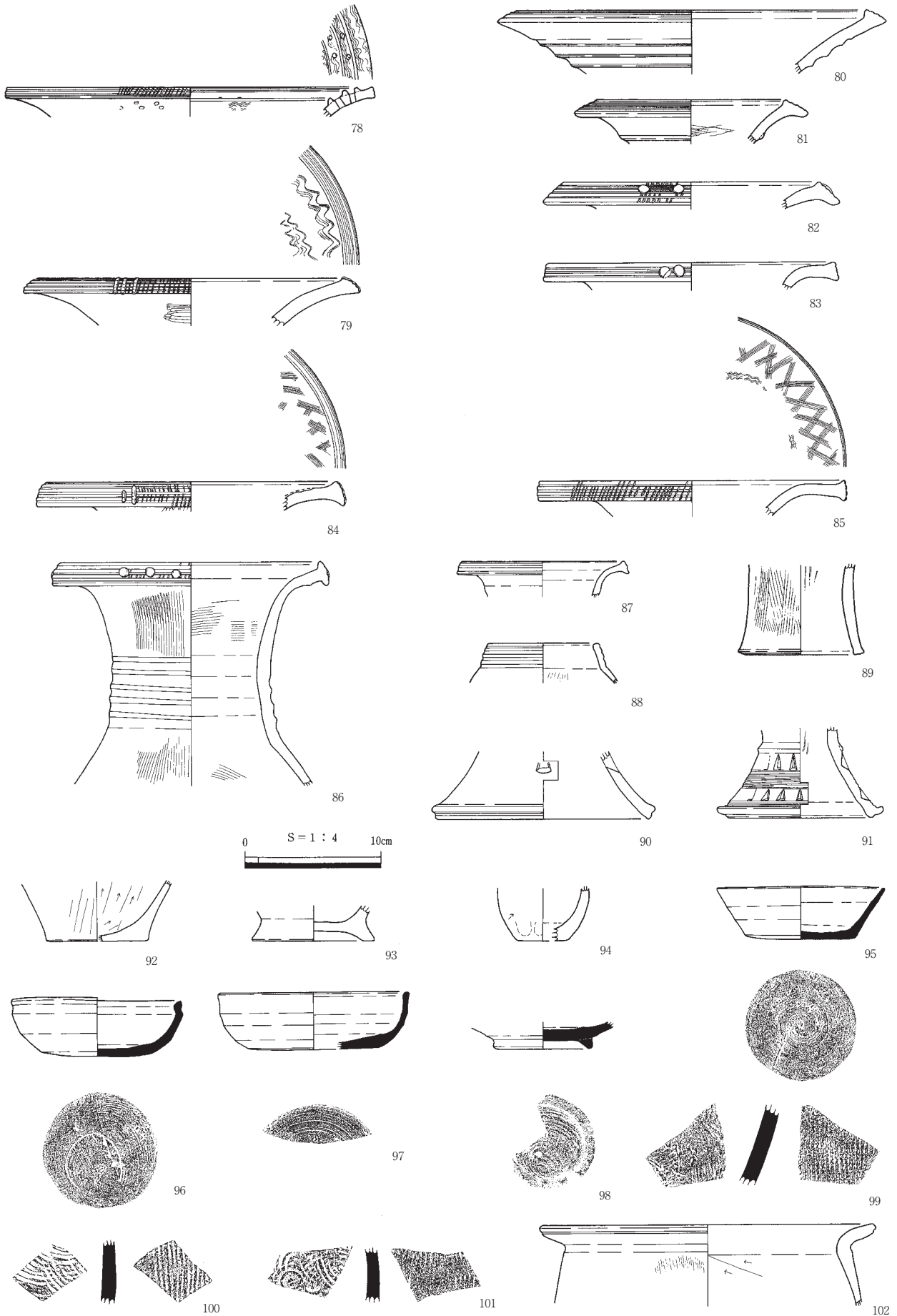
78～88は壺である。口縁部が朝顔形を呈し、いずれも端部に凹線文がめぐることによって共通しているが、円形浮文が貼り付けられる82・83・86や棒状浮文を持つ79・84などの違いがある。また、78は口縁部に突帯が数条めぐり、その間隙に穿孔が施されているなどの特徴を持っている。口縁部内部には、櫛描波状文が描かれる78・79と斜格子文を有する84・85が認められる。88は短頸壺であり、口縁部に4条の凹線が横走している。89～91は高坏脚部であり、89は筒状で内外面ハケ調整が観察される。90・91はスカート状に開いた形状で、裾部には凹線がめぐり三角形透孔が施されている。92・93は底部破片であり、後者は底面が高台状となっている。94は手づくねのミニチュア土器である。

95～101は須恵器をまとめている。95は口縁から体部が直線的に外反する坏身であり。底面は回転ヘラ切り痕が観察される。96・97は口縁から体部がやや湾曲しながら立ち上がる坏身である。口縁部直下がやや括れ、底面は回転糸切り手法である。これらは、Z4・A4グリッドの谷筋下方からほぼ完形で出土している。いずれも8世紀代に位置づけられよう。99～101は甕体部破片であり、外面は平行タタキ、内面は青海波文が見られる。102は口縁部がくの字状に屈折する土師器甕であり、外面調整は口縁から頸部はナデ、体部はハケ、内面は口縁～頸部はナデ、体部はケズリ調整である。8世紀代に帰属するものと思われる。

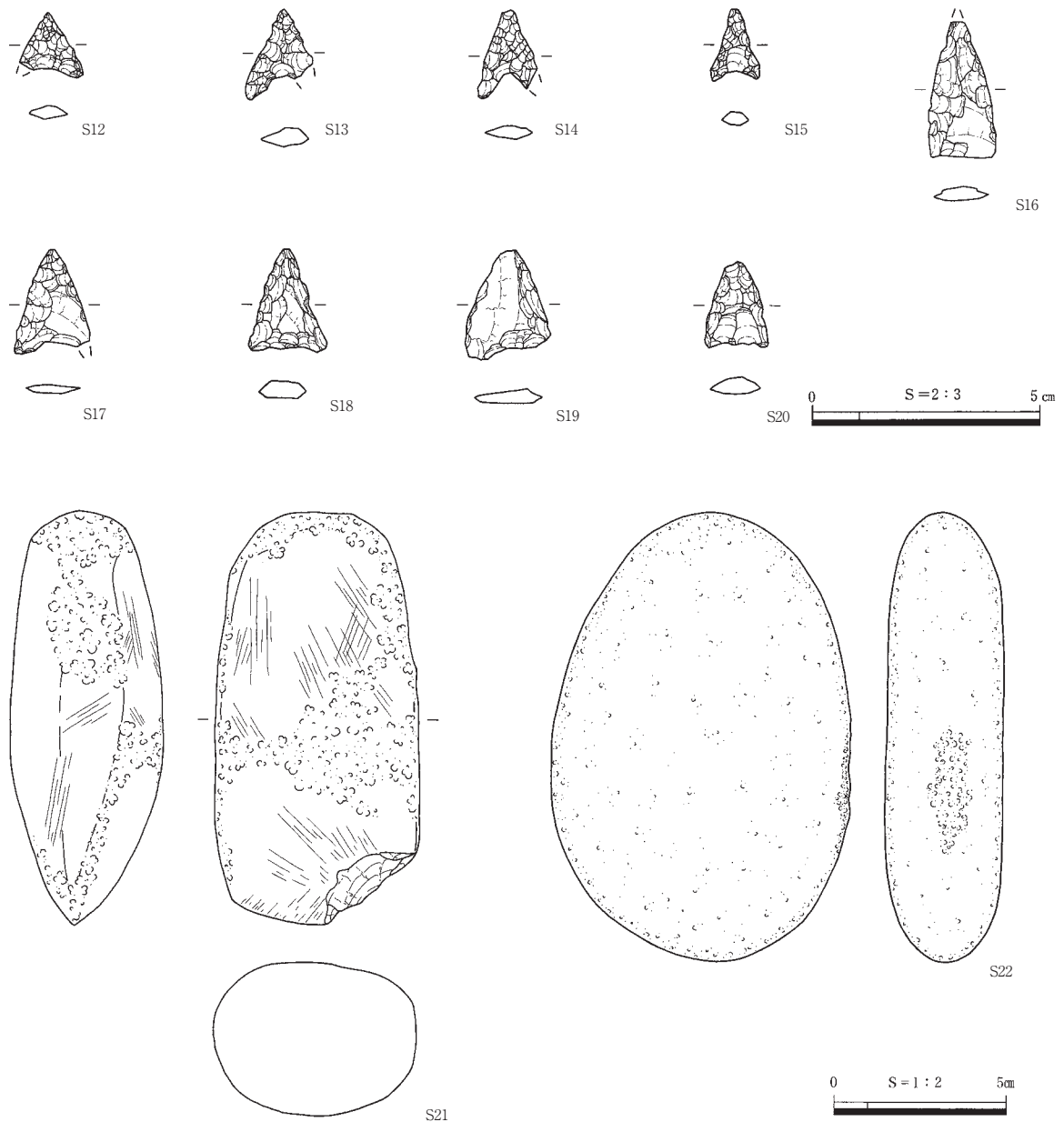
S12～20は凹茎式の石鏃をまとめている。黒曜石製のS12～15は脚部が欠損しているものが多く、いずれの挟りも深い。これに対し、サヌカイト製のS16～20は、基部の挟りが小さく、主剥離面を残すものが多く、やや粗雑な感が否めない。



第32図 遺構外出土遺物(1)

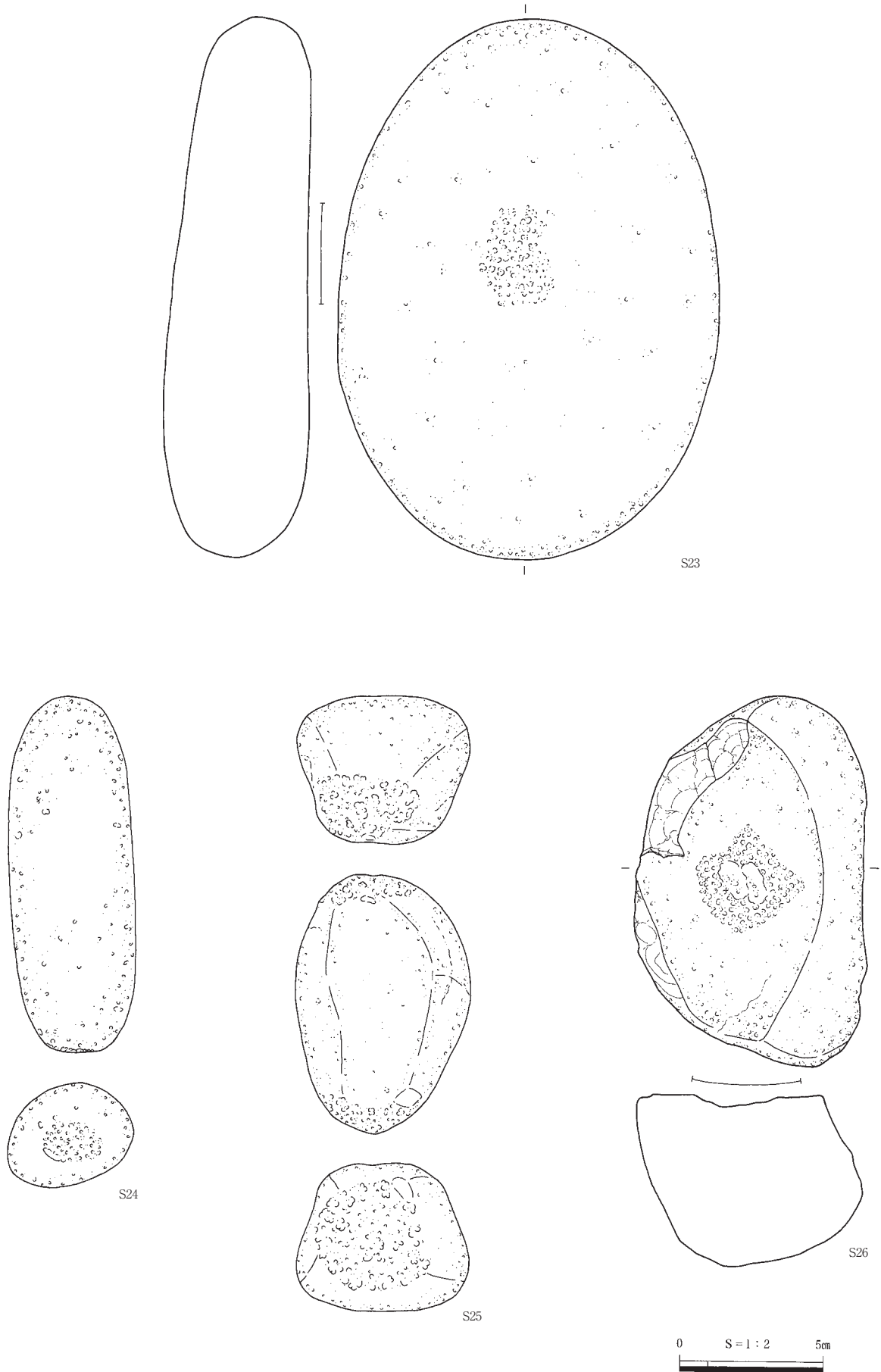


第33図 遺構外出土遺物(2)



第34図 遺構外出土遺物(3)

S21は伐採石斧であり、全面研磨が及ばず敲打による整形痕を残す。S22～26は敲石であり、板状の円礫を用いたS22・23、垂円礫の先端に敲打痕が見られるS24・25があり、S23・26などは石器製作などの台石として利用されていた可能性もある。



第35図 遺構外出土遺物(4)

表13 遺構外出土土器観察表

遺物No	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位 残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考	取上No
57	C5 II層	縄文土器 深鉢	※34.4 △14.1	口縁~体部 破片	外面：口縁部刻目突帯、体部ナデ 内面：口縁~体部ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：淡黄色 内面：淡黄色	良好		614・630
58	E7 II層	弥生土器 甕	※19.0 △7.1	口縁~体部 1/4	外面：口縁部1条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ナデ	径1mm大の白色砂粒	外面：橙色 内面：明黄褐色	良好		2227
59	B6 II層	弥生土器 甕	※20.2 △3.7	口縁~体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、体部調整不明 内面：口縁部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		592
60	C6 II層	弥生土器 甕	※15.4 △5.6	口縁~体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm大の白色砂粒	外面：橙色 内面：にぶい黄褐色	良好		603
61	C6 II層	弥生土器 甕	※15.0 △6.5	口縁~体部 1/4	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		793
62	C5 II層	弥生土器 甕	※14.8 △5.1	口縁~体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm大の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		538
63	B6 II層	弥生土器 甕	※16.8 △12.2	口縁~体部 1/4	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：黄褐色	良好		568
64	A3 II層	弥生土器 甕	※16.6 △8.5	口縁~体部 1/4	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1558
65	C5 II層	弥生土器 甕	※21.2 △4.9	口縁部 1/6	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部調整不明 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰褐色 内面：にぶい橙色	良好		2023
66	G10 II層	弥生土器 甕	※15.8 △3.7	口縁~体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		151
67	C5 II層	弥生土器 甕	※21.1 △4.2	口縁~体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ、体部調整不明 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：灰黄色	良好		517
68	B6 II層	弥生土器 甕	※13.6 △4.8	口縁~体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：明黄褐色	良好		555
69	C5 II層	弥生土器 甕	※17.8 △3.8	口縁~体部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部ナデ、体部調整不明 内面：口縁部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		805
70	B4 II層	弥生土器 甕	※21.8 △4.9	口縁部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：黄褐色	良好		2036
71	C5 II層	弥生土器 甕	※20.5 △3.2	口縁~頸部 破片	外面：口縁部4条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁部~頸部ナデ	径5mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		936
72	C5 II層	弥生土器 甕	※19.0 △4.8	口縁~体部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部貼付突帯、体部調整不明 内面：口縁部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	良好		729
73	B5 II層	弥生土器 甕	※17.2 △4.6	口縁~体部 1/6	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：明黄褐色	良好		1040
74	B4 II層	弥生土器 甕	※21.8 △3.8	口縁~頸部 破片	外面：口縁部3条凹線文・円形浮文、頸部貼付突帯 内面：口縁部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		280
75	B6 II層	弥生土器 甕	※20.4 △3.3	口縁~頸部 破片	外面：口縁部3条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白色砂粒・ 雲母片	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		1005
76	C5 II層	弥生土器 甕	※20.2 △6.5	口縁~体部 1/6	外面：口縁部4条凹線文、頸部貼付突帯、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：灰褐色 内面：橙色	良好		270
77	C6 II層	弥生土器 甕	※16.8 △4.0	口縁~頸部 破片	外面：口縁部4条凹線文、頸部貼付突帯 内面：口縁部ナデ、体部調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		551
78	B6 II層	弥生土器 壺	※27.2 △2.2	口縁部 破片	外面：口縁部2条凹線文、円孔有り 内面：口縁部襷描波状文、3条突帯	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：黄褐色	良好		589・594
79	C5 II層	弥生土器 壺	※22.6 △3.5	口縁部 破片	外面：口縁部5条凹線文、頸部ミガキ 内面：口縁部襷描波状文、ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		854
80	C5 II層	弥生土器 壺	※26.0 △4.7	口縁部 破片	外面：口縁部4条凹線文、3条貼付突帯 内面：調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：黄褐色	良好		483
81	C6 II層	弥生土器 壺	※14.0 △3.2	口縁~頸部 破片	外面：口縁部4条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		318
82	B4 II層	弥生土器 壺	※18.8 △2.0	口縁部 破片	外面：口縁部4条凹線文・円形浮文 内面：口縁部ナデ	径0.5mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		212
83	C6 II層	弥生土器 壺	※21.0 △1.9	口縁部 破片	外面：口縁部3条凹線文・円形浮文 内面：口縁部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：黄褐色	良好	外面赤色塗彩	550
84	C5 II層	弥生土器 壺	※21.2 △2.1	口縁部 破片	外面：口縁部5条凹線文、頸部ミガキ 内面：斜格子状襷描文	径1mm以下の白色砂粒	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		635
85	C5 II層	弥生土器 壺	※22.6 △2.6	口縁部 破片	外面：口縁部3条凹線文、ナデ 内面：口縁部斜格子状襷描文・波状文	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	良好		852
86	D11 II層	弥生土器 壺	※19.2 △16.4	口縁~体部 1/3	外面：口縁部3条凹線文・円形浮文、頸部ハケ・4条凹線文、体部ハケ 内面：口縁部ナデ、頸部ハケ・ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：黄褐色	良好		2230
87	A4 II層	弥生土器 壺	※12.1 △2.6	口縁~頸部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ナデ 内面：口縁~頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：浅黄色 内面：浅黄褐色	良好		1512
88	A3 II層	弥生土器 無頸壺	※8.0 △2.9	口縁~体部 破片	外面：口縁部4条凹線文、体部調整不明 内面：口縁部ナデ、体部ハケ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1584
89	B4 II層	弥生土器 高坏	※7.8 △6.6	脚部 破片	外面：口縁部2条凹線文、頸部ハケ 内面：口縁~頸部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		2029
90	C5 II層	弥生土器 高坏	底径※15.6 △5.0	脚部 破片	外面：三角形透孔、ナデ 内面：調整不明	径1mm以下の白色砂粒	外面：黄褐色 内面：明黄褐色	良好		682
91	H8 II層	弥生土器 高坏	底径※10.5 △6.6	脚部 破片	外面：2段三角形透孔・貼付突帯 内面：ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：にぶい橙色	良好		167
92	Z4 II層	弥生土器 甕	底径※7.0 △4.4	体部~底部 破片	外面：体部ミガキ、底面調整不明 内面：体部ヘラケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	良好		2077
93	C5 II層	弥生土器 脚付壺	底径※9.1 △2.6	底部 破片	外面：ナデ 内面：ナデ	径2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：浅黄褐色	良好		1102
94	C5 II層	弥生土器 小壺	底径※3.3 △3.9	体~底部 1/3	外面：体部ケズリ→ナデ・指オサエ 内面：体部~底部ナデ	径1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄褐色 内面：橙色	良好		548
95	Z4 II層	須恵器 坏身	※12.3 △4.9	口縁~底部 1/1	外面：口縁~体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り 内面：口縁~底部回転ナデ	密	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		1791
96	A4 II層	須恵器 坏身	※12.3 △4.4	口縁~底部 1/1	外面：口縁~体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁~底部回転ナデ	密	外面：暗青灰色 内面：暗青灰色	堅緻		1597・1791
97	A4 II層	須恵器 坏身	※13.9 △4.2	体部~底部 破片	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁~底部回転ナデ	密	外面：灰色 内面：灰白色	堅緻		1597
98	C5 II層	須恵器 高台付坏	底径※6.8 △2.1	口縁~体部 破片	外面：施軸、口縁部凹線 内面：施軸	密	外面：灰色 内面：灰色	堅緻		500・1303
99	A4 II層	須恵器 甕	— △5.5	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波文	密	外面：灰白色 内面：灰白色	堅緻		1520
100	A5 II層	須恵器 甕	— △4.0	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波文	密	外面：灰黄褐色 内面：黄灰色	堅緻	外面自然軸	1294
101	Z4 埋土	須恵器 甕	— △3.8	体部 破片	外面：平行タタキ 内面：青海波文	密	外面：灰黄褐色 内面：灰色	堅緻	外面自然軸	1765
102	Z4 II層	土師器 甕	※24.6 △6.0	口縁~体部 破片	外面：口縁~体部ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラケズリ	径1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好		1763

表14 遺構外出土石器観察表

No.	挿図・PL	遺構・地区・ 層位名	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	取上No.
S12	第34図 PL.16	C5グリッド II層	石鏃	黒曜石	1.4	0.3	1.4	1.2	1076
S13	第34図 PL.16	H9グリッド II層	石鏃	黒曜石	1.95	1.5	0.4	0.8	63
S14	第34図 PL.16	C6グリッド II層	石鏃	黒曜石	1.9	1.3	0.3	1.1	801
S15	第34図 PL.16	G6グリッド II層	石鏃	黒曜石	1.55	1.1	0.3	0.3	108
S16	第34図 PL.16	A5グリッド II層	石鏃	サヌカイト	3.0	1.5	0.3	1.4	1345
S17	第34図 PL.16	C5グリッド II層	石鏃	サヌカイト	2.3	1.65	0.2	0.8	891
S18	第34図 PL.16	D6グリッド II層	石鏃	サヌカイト	2.2	1.7	0.4	1.3	249
S19	第34図 PL.16	C4グリッド II層	石鏃	サヌカイト	2.4	1.9	0.35	1.5	239
S20	第34図 PL.16	B6グリッド II層	石鏃	サヌカイト	1.9	1.4	0.4	0.9	2116
S21	第34図 PL.17	C6グリッド II層	石斧		12.0	4.45	5.9	520.0	20
S22	第34図 PL.10	C6グリッド II層	敲石	安山岩	18.0	8.7	3.4	600.0	952
S23	第35図 PL.10	G5グリッド II層	敲石	安山岩	13.3	18.8	5.1	1960.0	82
S24	第35図 PL.10	A5グリッド II層	敲石	安山岩	12.4	4.5	3.7	270.0	1295
S25	第35図 PL.10	G8グリッド II層	敲石		9.0	6.1	5.15	370.0	38
S26	第35図 PL.10	C5グリッド II層	敲石		12.8	8.0	5.5	720.0	641